

殺伐とした世相

本編は、次の12項目からなる。事件・事故の発生順での配列を原則としているが、例外もある。

- ① 免許停止中に事故を起こした都議
- ② 同級生を刺殺した中学生の言い分
- ③ 大口病院連続殺人の言い訳
- ④ 老人施設入所者の点滴に空気を入れた元看護師
- ⑤ 大阪北新地のクリニック炎上
- ⑥ 横浜地下鉄内で2人の女性を殴りつけた女
- ⑦ フィギュアスケートはジャンプ競技？
- ⑧ 中国幹部との不倫を告発した女子選手の変節
- ⑨ 中国・台湾侵攻への準備万端
- ⑩ プーチンの野望・ウクライナへ侵攻すること
- ⑪ 中国・権威主義国家の圧政ぶり
- ⑫ デイオール広告モデルの無愛想

・文中敬称略。

・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。

・以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意識したもの。

① 免許停止中に事故を起こした都議

【毎日新聞夕刊 2021/9/17 社会

都議会で辞職勧告を受けた木下都議が、本会議を欠席。割り当てられた質問機会も無にした。問題発覚後、姿を見せないが、議員報酬と政務活動費が月約132万円支払われており、都民から怒りの声が上がっている。都議会局によると、木下氏からは18日に体調不良とする欠席届が郵送で届いた。取材にも応じず沈黙を続けている。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/17 社会

警視庁は9月17日、木下富美子都議（54）を無免許運転で事故の疑いで書類送検した。東京都議選の選挙期間中に無免許運転で人身事故を起こして逃走などし

たとする。同庁は無免許運転を繰り返していたとして「厳重処分」の意見を付けた。

免許停止中だった7月2日、東京都板橋の都道交差点で、停車後にバックして後方にとまっていた乗用車に衝突、そのまま逃走し、その車を運転していた男性と同乗の女性の首などに軽傷を負わせたとしている。また5〜6月に都内で6回にわたって乗用車を無免許で運転していた疑いもある。都議は発覚後、地域政党「都民ファーストの会」から除名された。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/10 社会  
無免許事故の木下都議が辞職否定、「体調不良」から4か月ぶりの公の場に出た。2度の辞職勧告決議、反発が続く議会。】

【毎日新聞夕刊 2021/11/10 社会  
木下都議が出席を予告した都議会公営企業委員会は10時間以上開けず、深夜に流会した。体調不良を理由に欠席していた。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/13 社会  
木下富美子都議（55）に質疑に応じるよう要請することを決めた。18日の議運営委に出席して主要5会派がそれぞれ10分ずつ公開で行う予定。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/18 社会

都議会、きょうの議運営委に木下氏欠席へ、「体調再び悪化」】

【毎日新聞朝刊 2021/11/19 社会  
木下都議を24日再招致、議運委に。18日の議運委に招致されていたが「体調が再び悪化した」として欠席を連絡していた。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/20 社会  
木下都議を在宅起訴、無免許運転7回。いずれも別の交通違反で運転免許停止の処分を受けた期間中に運転していた。地検は常習性が高いと判断し、罰金を求める略式起訴でなく、在宅起訴を選択した。】

【読売新聞朝刊 2021/11/23 社会  
木下都議が辞職。無免許運転、順法意識が弛緩したことを陳謝。小池知事に会い、助言された。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/23 社会  
木下都議が辞職。反省なし、遅きに失す。各会派から批判。「勧告決議に実効性を」

大阪維新、長期欠席議員の報酬カットについて条件提案へ。】

【毎日新聞夕刊 2021/11/24 近事片々  
世間とのズレは最後まで。やっと辞職の木下都議、議会に「村八分」にされたと恨み節。】

## 1. 発覚

木下都議は、都民ファーストの会に所属し、2021年7月の都議選でめでたく当選し、2期目に入っていた。押しも押されもしない中堅どころの議員として都議会に出席することが期待された。選挙区の板橋区民の多くも、そう考えていたことだろう。ところが、投票日を過ぎてから、間もなく無免許事故が発覚した。投票日の2日前の選挙運動中にその事故を起こした。

無免許で交通事故を起こしたことが発覚してから、非難の嵐が沸き起こった。不寛容な世の中であり、ギスギスしているから、ちよつとしたことでも許してもらえないところがある。

事故は都議会選の選挙運動中だった。発覚したのは、投票日の後だ。それがわかっていたなら、有権者は彼女に投票しなかった可能性が大きい。つまり、落選していた。彼女に投票した人は、それを知ってがっかりしたことだろう。それを考えるだけでも、辞職が妥当だろう。

無免許（免許停止中）で事故を起こし、そのまま逃げたことは、都議にあるまじき行為にちがいない。それがバレても都議を辞職しないのは、そうとうに厚か

ましいことだろう。それを隠そうとしたことになるし、反省の色が見えない。

## 2. 辞職しろという声が高まる

数日後にマスメディアをはじめとして、バッシングの嵐が巻き起こる。マスコミの取材攻勢があった。彼女の自宅には、石を投げつけられ、窓ガラスが割られたという話も聞こえてくる。

所属していた政党からは、即日、除名の処分が決められた。政党からの除名処分は、政治家として「見放された」という意味があるだろう。議員としての活動は相当に制約される。実質的な辞職勧告だ。

彼女は辞職をせず、都議会には、体調不良として4カ月も欠席した。見方によっては、その間、謹慎していたのかもしれないし、精神的なショックで、うつになつていたのかもしれない。「世間に顔向けできない」と思っていたのかもしれない。

しかしながら、何カ月も休職するなら、議員を辞めるべきという考えも当然浮かび上がる。欠席は、ほとんど「ずる休み」に見える。議員としての役目をはたさないのだから、ますます「辞めるコール」が強くなる。

体調不良というのは、口実であり、あまりのバッシングのすさまじさに、恐れをなして人前に顔を出せなかった、あるいは引きこもっていた、と私には思える。体調不良というより、「心の不調」を休職の理由にするかどうか。少しは同情を引くかも知れない。いずれにせよ、医師によつて書かれた正式な診断書の提出が必要なケースだろう。

都議会において、木下都議に対する辞職圧力が強まった。

・都議会は2度の辞職勧告を決議した。

・議会運営委員会は、何度か彼女を呼び出し、説明を求めようとした。

・議長も彼女に議長室を訪れるよう「召喚状」を出した。

結局、そんな呼び出しにも、彼女はやはり「体調不良」を理由に応じなかった。議長の顔をつぶすこともして、議会軽視もはなはだしい。

3. 交通違反や事故を起こせば、議員を辞めなければならぬ？

木下都議が、数カ月の欠席後、ようやく都議会・委員会に出席しようとしたところ、それを阻むかのよう

に、その委員会を開催に当たって紛糾し、さらに都議院運営委員会が質疑の場を設けた。それを彼女は拒否したから、またもめた。彼らは木下富美子に質疑に応じるよう要請したが、そこは彼女一人に対し、複数の者が代わる代わる質問する場だった。彼女には質疑の内容がわかっていたし、質疑にいくら答えても、納得するような人たちではないことがわかっていた。彼らはもう聞く耳を持たず、しつこく辞職を勧めるだけだろう。彼女は針の筵むしらに座らされるようなものだから、拒否するのも無理はない。

もしも、木下富美子がそんな席に出たならば、複数の委員が、木下富美子に向かって睨みつけながら、言い放つことだろう。「議員を辞めなさい！」。

それに対し、木下富美子は「都議は、交通違反をしてはいけないんですか？」と反論しそうだ。

都議としての資質が問われるのだが、都議は交通法に違反したり、交通事故を起こしたりすれば、「その資質なし」と判断すべきなのだろうか。交通事故を起こしたことで、議員を辞職する必要があるかどうか、問い直したい。

彼女の場合、事故を起こしたことよりも、常習的に交通法規を無視してきたが大きい、法令遵守（順守）

の心得に欠けていることが問題だろう。コンプライアンスの軽視だ。「法を守れ」というべき立場にある。

それで「議員の資格なし」と判断するにしても、都民が行うことだろう。いったん当選した議員を辞めさせるには、リコールをして解職すればよいことだ。都議会では、解職できないことになっている。議会が勧告するのはよいとして、強く辞職を迫るのも、法的にはできない。

「交通違反ぐらいで、都議をやめてたまるか！」という声が、木下富美子の部屋から聞こえてきそうだ。

「道路交通法違反に関して、司法によりそれなりの処罰を受けるが、そのことで都議会からとやかく言われる筋合いはない」と思っていたのだろう。「免職や更迭させられるのならともかく、辞職するか否かは、私の勝手だ。辞任は私が決めることだ。辞職勧告の議決にしても、勧告では強制力はないよね。そんな勧告、へでもない！」

#### 4. 議員報酬・政務調査費の支給

何もせずとも毎月、報酬と政務調査費だけはしっかりとらっていることが指摘され、都民のやつかみ感情がさらに燃え上がる。

議会に出なくとも、議員報酬・政務調査費は支払われることは、不法なことではない。受け取る側にしてみれば、法的に定められた額であり、なんらやましい金ではない。

しかし世間では、「何だ、議会に出席せずに、毎月132万円もらっているのかよお」と怒りまくる。議会に出席せずとも報酬と政務調査費がもらえるという制度的な問題を、個人に向けて怒っている。報酬はともかく、病気などで欠席している議員に政務調査費、月50万円を出すのは気が良すぎる、と私も思う。

その間、議員活動は何もしていないのだから、何らの費用は発生しない。木下富美子の問題ではなく、それを決めた都議会が悪い。特に与党系の議員たちの責任だろう。

それでなくても、都議会の政務調査費は高額すぎるという批判がある。領収書なしで、使途不明でも支給されることに重大な問題があると私も指摘したい。

#### 5. 事故のいきさつ

なぜ無免許で車を運転していたのか、事故を起こして逃げたのはなぜか、という説明をする責任があるだろう。その理由を聞きたいというより、問い詰めて辞

職に追いやりたいのが、議運委の思惑だろう。正当な理由が、木下富美子の口から語られることはまずないと思われる。辞職を促すために問い詰める。異物として排除したい考えだろう。

彼女にとって車は必需品であり、車で移動することが便利だから、免停になっても乗り続けていたのだろう。運転には自信があったのだろう。過去に違反の内訳では、速度違反2回、携帯電話使用2回、信号無視1回、一時停止無視1回があつて、かなりそそっかしい運転をしていた、とみられる。もちろんこのとき、木下富美子は都議だった。また捕まる恐れは十分にあつたのに、運転を続けたのはいい度胸だ。そして事故を起こした。

運転には自信があつても、後ろをよく見ずにバックさせ、停車中の車らぶつけてしまった。それは不注意だったのか。そうかもしれないが、彼女には、わざと事故を起こした疑いがある。

板橋区の都道の交差点で、彼女は信号待ちをしていた。進行方向の矢印信号が点灯（青信号に等しい）しても、発進させなかった。その前にも、車をふらふらさせて運転していたというから、彼女はスマホの操作をしていたのかもしれない。後ろの車が、注意のため

にクラクションを鳴らしたところ、彼女は「煽れた」と感じたのか、なんと、シフトレバーをバックに入れ、車を後進させ、その後ろの車にぶつけたのだ。それはわざとらしい行為だ。

「あわててシフトレバーをバックに入れた」とも解釈できるところだが、そうは思えない。うしろからクラクションを鳴らしたことに對する報復のつもりだった可能性がある。それで逆上して「車をぶつけてやれ」という発想が瞬間的に浮かんだものと、私は推測する。そして逃げた。「わざと車をぶつけたから、そのまま逃げた」という推測が成り立つ。もしも、誤ってシフトレバーをバックに入れたとしたら、すぐに自分の過失に気づき、ぶつけた車の運転者に謝りに行くはずだ。

逃げたけれど、後ろにいた運転手が追いかけて、車を止めさせられた。その男性が「なんで逃げる！」と怒鳴り込むように詰問すると、女が都議であることが分かったのだから、あきれたことだろう。それが都議という名士のすることか。

うしろからのクラクション一つで激怒したのは、選挙期間の終盤に差し掛かり、その不利な情勢に彼女はあせりを感じ、いらついていたから、とも推測され

る。

故意に事故を起こしたのなら、都議を辞めさせられるのも、自業自得というものだ。最初の辞職勧告に素直に従うしかなかったはずだ。彼女は、開き直って辞めなかったことになる。

週刊誌の情報などによると、彼女には「勝気で、気性の激しい女」というイメージが付きまとう。(ただし、イメージを語るのは偏見につながりやすいので、注意を要す)

彼女は90年代後半に結婚し、まもなく1999年に長女を出産した。彼女の名義で一軒家を購入して三人で暮らし始めたが、夫は早々に、逃げ出すように離婚したそうだ。けんかの際、彼女にやりこめられたのだろうか。その娘も成長するに伴い、激しい親子喧嘩を繰り返したことが証言されている。近所には、母の怒号がよく響いたという。あるとき娘は冬の深夜に、家を締め出されたことがあり、外から二階の窓に石を投げつけ、ガラスを割ったという騒ぎや、娘が「助けてー」と叫んで警官を呼んだことがあったという。語学に堪能な木下富美子(東京外語大卒)だから、夫や娘に対して、すさまじい言葉を投げ付けた、と私は想像する。

政治家ならば、家庭内の人間関係をうまくやっていけるだけの度量や管理能力の高さが必要だろう。車の運転技術はどうであつても……。

#### 6・小池百合子都知事の貫禄

議員が選挙後3カ月以内に辞めれば、同じ選挙区の次点になった候補者(下村博文の元秘書、河野雄紀元都議)が繰り上がり当選になるというのだから、自民党としては、ぜひ辞めさせたいところだった。木下富美子や都民ファーストの会も、それを知っており、それを阻止するため、3カ月粘った(粘らせた)という憶測も成り立つ(週刊文春12月2日号が指摘している)。

ただし、そのために自民党が「辞任キャンペーン」を張ったなどと彼女が主張するのは、ただけしい。自分の辞任がライバル政党の得になったとしても、文句は言えない立場なのだ。この際、自民党に議席を譲るぐらいの謙虚さがあつてもいい。

四面楚歌の、村八分状態にされた木下富美子。そんな彼女に助言したのが、小池知事だった。11月22日のことだ。結果的に彼女は3カ月以上粘った。

小池氏は、都民ファーストの会を立ち上げた中心人

物だ。会のメンバーとして木下富美子を推薦・登用し、2017年7月の木下富美子最初の都議会選で尽力したわけだろう。木下富美子にとって、恩人であり、上司にあたる人でもある。最初の接点は、2003年、小池百合子氏が環境相として「クールビス」キャンペーンを始めたとき、木下富美子は大手広告代理店で関連業務の一端を担ったということだ。

その日、知事は木下富美子に会って、辞職を勧めた。おそらく、小池知事が知事室に呼びつけたのだろう。都民ファーストの会の顧問として、かつて木下富美子を見出し、政治の世界に引き入れた張本人として、責任を感じたのかもしれない。

知事「あなた、ここは辞めなさい。辞めなければ攻撃される一方よ。多勢に無勢で、防戦不可能よ。反省する態度を見せることが肝要ですよ。そうすれば、復活するチャンスがでてくるだろうし、あなたは有能な人なんだから、しばらく謹慎するふりをしてから、次の機会に、出直せばいい（そのうち都民はこのことを忘れるだろうし……）」などと言って、辞職を勧めたのだろう。

そして、遅きに失した辞職表明になった。小池氏だけが説得に成功したのだから、「さすが」といふべき

か。

## ② 同級生を刺殺した中学生の言い分

【毎日新聞朝刊 2021/11/26 社会】

愛知中3刺殺、11月24日午前8時10分ごろ、少年（14）は事前に用意した包丁で同級の男子生徒の腹部を刺した。傷は大動脈や内臓まで達し、出血性ショックで死亡した。同校には自分のクラス以外の教室に入っていけないルールがあったという。教室の廊下呼び出した。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/26 社会】

愛知県弥富市の私立中学校で中学3年生の男子生徒（14）が刺殺された事件で、殺人容疑で逮捕された同学年の少年が「嫌がらせを受けた」と供述していることが判明した。県警は2人の間にトラブルあったとみて動機面を調べている。

11月24日朝に、別クラスの男子生徒を教室から廊下呼び出し、手に持った柳葉包丁（刃渡り約20センチ）で男子生徒の腹部を刺した。男子生徒は教室に戻って倒れたという。死因は腹部の刺し傷による出血性ショックだった。凶器の包丁はインターネットを



通じて購入し、かばんに入れて登校したという。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/27 社会】

愛知中3刺殺、動機を慎重に捜査する。「生徒会の選挙に立候補した男子生徒に応援演説を頼まれたのが嫌だった」少年が普段一緒にいるグループ内の会話に男子生徒が割って入ることに不満があった」

捜査関係者によると、「2人は仲がよかった」との情報があるという。】

【読売新聞朝刊 2021/11/28 社会】

加害生徒は、2年生の時（同じクラスだった）「給食当番の時、すぐに箸を渡してくれない時があった」などと学校に訴えていたことが分かった。学校生活のアンケートやその後の面接で、生徒への複数の不満を述べていたという。「演説は嫌だったけれど、断り切れなかった」 県警の調べに対して「嫌がらせのように感じていた」と供述。

そのため学校は被害生徒に「相手の気持ちを考えて行動を」などと指導した。加害生徒に対して担当教師が「その後は大丈夫か」と複数回声を掛け、加害生徒は「大丈夫です」と答えたという。3年に進級した後は、目立ったトラブルはなかった。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/15 社会】

愛知県弥富市の中学校での刺殺事件の少年を名古屋家庭に送致した。少年は事件直前の14〜16日にあった修学旅行中、携帯電話を持ち込んだことが他の生徒に見つかって、教諭に没収されたことなどを挙げ、「疎外感を感じた」「嫌なことが重なって自暴自棄になった」「すべてがどうでもよくなった」

死亡した男子生徒やその家族に対して問われると、「申し訳ない」

両親が少年に書いた文書の要点「一生をかけて償ってもらいたい。息子は人の嫌がることをしたり人を傷つけるようなことを言ったりする子ではありません」男子生徒が、いじめがあった、嫌なことをされたと供述したことについて、「息子を失って悲嘆に暮れている中、私たちはさらに深く傷つけられました。息子を逆恨みしたうえで、犯行ならば、本当にやり切れない」「大切な息子を奪い、取り返しのつかない凶悪な行為をしたことについては絶対許すことはできません。家庭裁判所には厳重に処分していただきたいと思います」】

【読売新聞朝刊 2021/12/2 社会】

愛知中3刺殺、加害生徒はスマホで「人を簡単に殺害する方法」についてネット検索していた。事件につい

て「今になって考えると、自分がしたことは悪いことだった」と話しているという。】

被害生徒Bの両親が書いた文書には、すさまじい怨念が込められている。悲鳴のような言葉で、加害生徒Aに対する恨みつらみが書かれている。(息子にいじめられたからだ?) うそをつくな、この悪ガキめ、息子のせいにするな!)という怒りが感じられる。

「一生かけて償え!」という言葉がするどい。Aがいくら「申し訳ない」と謝っても、許してもらえそうもない。もしもAが両親と対面する機会があれば、ぶん殴られる覚悟をしなければならない。

取り返しのつかないことをしたというものだ。加害生徒Aに正当な理由などないけれど、Bに対してAに殺意が生じたのは何だったのか、考えてみたい。

逮捕後、取り調べ官は、それを究明するために、AとBの関わりについてしつこく問いただした様子がかげえる。何かトラブルがあったのか、というところに焦点を絞ったことだろう。過去にAがBに、じらされたり邪魔されたりというささいなことを、Aは供述した。

AがBに「嫌がらせ」をされたというのは事実かも

しれないが、ほとんど1年前の話であり、そのことを恨みに思い続けて刺殺したというのは、動機として成立しがたい。

確かに、彼らが2年生の時に、複数の「嫌がらせ」や「生徒会選挙の応援演説をやらされた」ことへの不満がAにあつて、教諭に相談したとある。でも、これらは、いじめ問題に敏感な教師が、Aが示したアンケート回答に〈ほやき〉が書かれていたものだから、Aから〈誘導して聞き出した〉ことと考えられる内容であり、少年たちによくある「ふざけ行為」(戯れ)、あるいは「ちょっかいを出す」といったたぐいのものだ。

Aは〈嫌だった〉と供述したが、いずれも一時的な、軽いことだろう。いじめにはほど遠い。応援演説にしても、友だち同士だから断らなかつた、と思えることだ。彼には強く拒否する理由もなかつたはずだ。友だちとして見込まれていたことを意味する。ただし、少年期の友だちは、ライバルにもなりうる。ライバルとして意識しうる。

動機として急浮上するのが、「スマホ取り上げ事件」だろう。Aは「なぜ修学旅行にスマホを持って行ってはいけないのだ?」と、強い疑問を持ったことだろう。それを見つけて、先生に言いつけた級友たちにも恨み

を持ったことだろう。その憤りを誰かにぶつきたくな  
ったことが推測される。

Aの言い分を推測してみると、「彼らもスマホを持  
つていきなかつたんだ。でも、ルールに縛られていた。  
そして教師のヤツが、怒鳴りまくり、オレのスマホを  
取り上げた。オレの親にも言いふらし、親のしつげが  
悪いなどとなじった。おかげで、オレは親からも怒ら  
れた。

スマホを持つことが、何が悪いんだ！ ダメなもの  
はダメというような理由で、だれが納得できるか！  
旅行中に、仲間と連絡を取り合ったり、地図情報を見  
るのに、便利じゃないか。スマホで写真を撮るつもり  
でもいたんだ。カメラとして使うんだ。

テメーら教師がへんなルールを勝手に定めて、オレ  
たちに押し付けやがって。何の権利があつて私物を取  
り上げるんだ！」

楽しいはずの修学旅行が台無しになった。さんざん  
な修学旅行から帰った直後、Aの不満が膨れ上がった。  
やり場のない怒りが渦巻いた。そんな不満の矛先が、  
Bに向けられた。へかつて、あいつにいじられたな。  
優等生のあいつは苦勞せずに進学するんだろうな。あ  
いつを刺せば、むしゃくしゃした気分が、いくらか収

まるかもしれない……」

自棄やけになつた少年は「すべてがどうでもよくなつた」  
と供述した。つまり、スマホを没収されたことから、  
さらにほかにも、まだ供述されていない不快なことが  
重なつて、八つ当たりのな行動に走つた可能性が大き  
い。刺したあと、どうなるかは、Aは想像しなかつた。  
冷静さを失つていたためか、考えが及ばなかつた。  
「ええい、どうにでもなれ！」という心境だつたら  
う。

そして、Aはネットで鋭利な包丁を購入した。ネッ  
トは、14歳の少年にも包丁を売ってくれるわけだ。  
刺しどころによつては、人は死んでしまう。AがB  
の腹部を刺したのは1回だけだつたようだが、それで  
Bの大動脈を傷つけた。これは致命傷になりうる。

### ③ 大口病院連続殺人の言い訳

【毎日新聞朝刊2021/10/14 神奈川

旧大口病院連続死、2016年入院患者3人の点滴  
に消毒薬を混入して殺害したとされる元看護師・久保  
木愛弓被告の鑑定医証言、「自閉スペクトラム症（A  
SD）の特性があるものの事件への影響には「直接は

なかった」】

【毎日新聞朝刊 2021/11/5 一面

旧大口病院連続中毒死、急変した患者への対応に手間取り、家族に厳しい言葉をかけられることがあった。それが彼女にとって不安や苦痛になった。精神科を受診し、休職を勧められた。退職し、新たに旧大口病院を新たに就職先としたが、そこは終末期患者が多く、急変して死亡した患者の家族が病院の看護師らに強い言葉を使う場合に再び立ち会った。心理的に追い詰められた。「自分の勤務外の時間に亡くなってほしい」と思うようになり、そのために消毒薬を点滴に混入することを思いつく。消毒薬が体内に入った人が死亡したニュース（誤って入れられたもの）を知っていた。最初の犠牲者、興津さんが2時間後に死亡したことを知った久保木被告は「ほっとしたという気持ちの方が大きかった」】

【毎日新聞朝刊 2021/12/23 神奈川・追憶 2021

休職していた彼女が、次の勤務先として大口病院を選んだのは、急変時に無理な延命治療をしない同意が家族との間で取れていると（病院側から）説明があったからだ。だが、実際には度々延命治療を施し、家族対応への不安は消えなかった。】

患者の死の場面に立ち会う職業、看護師。なかなか大変なようだ。興奮した遺族から、怒られたりなじられたりするのだろう。終末期の患者でさえ、延命治療をしたり、家族に危篤を連絡したりの緊迫した場面になるのだろう。それが元看護師・久保木愛弓にとってトラウマになった。（もう延命治療はしたくない）と思うようになった。

延命治療はしないということで大口病院に就職したのに、ここでもそれが行われていた。延命治療にも、いくつかのレベルがあって、人工呼吸器を取り付けたり心臓マッサージをするとかの救命措置はともかく、看護師が行うべき最低限の手当てはするものだろう。症状に対応して、容態を回復させるための努力はしなければいけない。

最低限のことをしなければ、看護業務を果たしたことになる。それでは見殺しにするようなことだろう。一方で、危篤の状態から、心肺補助装置をつけるなどして延命治療を施せば、患者はなかなか死なない患者は長い間生死をさまようことになる。家族はそんな機械につながれたような患者の姿など、見ていられない。最期のときを待つ間、病院の待合室でつめる家

族たちは、つらい。イライラが募ることだろう。ようやく死を迎えたとき、中には看護師に食ってかかる人もいるだろう、「なぜ楽に死なせてあげなかったのよお」

早く死んでも遅く死んでも、看護師は遺族に対応しなければならぬ。多くの場合、責められることになる。遺族にとつて、それが最善の治療だったのか、わからない。あるいは、手を尽くした結果だったのか、わからない。死という厳然たる結果をみれば、すべての治療が無駄だったのかという疑いを持つ。医師や看護師たちが無駄な努力をしていたのだろうか。

いずれにせよ、患者の死に立ち会えば、遺族に泣かれたり治療方法への不満が噴き出されたりして、看護師はつらいのかもしれない。

延命治療をしないと云っていた病院が、それを度々していたという事実も、私には興味深い。病院の裁量の範囲内のことなんだろう。病院を安定的に経営するためにそれが必要だったのかもしれない。

久保木愛弓は、患者の死に立ち会うのは嫌だと思うようになり、それを回避する手段として、「消毒液を点滴に混入する」ことが有効だった。自分の退勤時間の前にそれを行えばいい。一人の患者で成功すると、

またやってしまった、ということだろう。(どうせ、この患者たちは早く死んでもいい人ばかりだし……) それなら、大口病院のように終末期患者を多く受け入れる病院でなく、別の病院や別の診療科に転職する方がよかつたと思うが……。患者が不自然な形で次々に死ねば、部屋に出入りしていた者が疑われるに決まっている。

#### ④ 老人施設入所者の点滴に空気を入れた元看護師

【毎日新聞朝刊 2021/12/9 社会

茨木県古河市の介護老人保健施設「けやきの舎」で、2020年7月、入所していた男性(76)の体内に空気を注入して殺害したとして、当時の介護職員として勤務していた赤間恵美容疑者(35)を殺人容疑で逮捕死因は空気塞栓による急性循環不全だった。この施設では複数の入所者の不審死が確認されている。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/30 社会

茨木県古河市空気注入、別の入所者・鈴木喜作さん(84)殺害容疑で施設元職員を再逮捕。容体急変で搬送された病院でコンピューター断層撮影(CT)検査を受けており、捜査本部は画像をくわしく分析し、赤

間容疑者が鈴木さんの体内に空気を注入して殺害したと判断した。」

点滴をしている老人をターゲットに複数の「処置」をしたことが疑われる。手慣れた手口で老人たちを殺してしまったようだ。毒薬を使うわけでもなく、血管内に空気をシリンジ（注射器）で入れるのだから、比較的手軽な方法だ。これは、金銭を目的としたものでもなく、老人とのトラブルでの仕返しのためでもなさそうだ。怨念のような強い殺意は感じられない。日常の処理をしていたようにみえる。シリンジで空気を入れると、老人たちはあっけなく死んでしまうことが、彼女にとって罪の意識を感じられないことだったのかもしれない。殺害した動機は何だったのか、不謹慎ながら、興味深い。

血管内に空気を送り込むではいけないことは、医学的に初歩的な常識だろうが、それで殺害に至る例はめったにないことだろう。それが不審死の説明が遅れた理由の一つかもしれない。

殺人容疑で逮捕されたのが、赤間恵美容疑者だ。主な経過項目を示すと、高校卒業後、看護師を目指し、それを実現している。

2011年頃から埼玉県内の病院で看護師として勤務。まじめな看護師だった。

2014年頃からおかしくてきたという証言がある。

スピリチュアルやあやしげなダイエツト法にこつたり、高価なプレスレットを買ったりして、金遣いの荒い生活をするようになった。

2020年4月下旬、赤間恵美は「けやきの舎」で介護職員として勤務

2020年5月30日、鈴木喜作さんの容態急変。その後の捜査で空気注入による殺害容疑が判明する

2020年7月6日、吉田節次さん急死。同僚に見咎められた赤間恵美はすぐに退職

2020年11月に結婚届けを出し、姓を変えた。空気注入容疑の事件後のこと。近所の人の話によると、姿を見られると、夫の後ろに隠れることがあったと証言。

2021年11月に万引き事件を起こした。

2021年12月、吉田節次さん殺害容疑で逮捕。

彼女はピストン式のシリンジを繰り返し操作して、点滴の管から短時間に大量の空気を血管内に送り込んだとされる。被害者は、声を上げる暇もなく、たいし

て抵抗もせず、意識を失ってしまった状況がある。  
（このへんのことを細かく書くと、模倣する人が現れ  
そうだ）

赤間恵美容疑者はその施設の職員だった。看護師の資格があるのに、ランクを下げるようにして、わざわざ老人介護の仕事をするに、私が違和感を持つところだ。通勤や職務時間で、この施設で働くことが都合のよいことだったのかもしれないが、病院勤務を嫌ったとも受け取れる。

そのとき、彼女が男性の部屋で不審な行動をしていることを同僚が見とがめ、問い詰めた。殺害が疑われたことで、彼女は男性が死亡した日にすぐに施設を辞めた。不審死の直後だったから、疑惑はさらに深まった。

2020年7月の男性の死亡を、殺人と警察が確信するのは2021年12月になってからだから、警察が慎重に捜査したにしても、けっこう時間がかかっている。

介護老人保健施設での死はありふれているにしても、入所者が突然死ぬことは、やはり不審死として扱われるだろう。でも、司法解剖もされず、死因を深く追及しないことを赤間恵美容疑者は知っていたのかもしれない。

ない。もちろん、外傷はなく、血液中などから毒物が検出されないことはわかっていた。でも、よく調べれば、空気を注入されて死亡したことがわかってしまう。空気塞栓症だ。

司法解剖する代わりに、CTスキャン画像とることは、病変や死因を特定するうえで、かなり有効なようだ。画像データなら、半永久的に保存できるので、見直せる。第二の殺人が、この画像を再分析することで、明らかになった。鑑識官「ん？ 気泡が血管にぎょうさん入っている。病院ではこれを見逃したんか？」とつぶやいたりして。

この施設では、複数の不審死があったといわれているが、第三の殺害が明らかになるのだろうか。

ネット情報によると、彼女の周りでモノがよくなくなるという事例がいくつか寄せられている。いわゆる、盗み癖だ。現に、2021年11月に万引きの現行犯で逮捕されている。店側が彼女の行為を悪質と判断して警察に通報したものでしょう。この逮捕が、不審死の解明につながったとされる。

つまり、彼女には、モラルに欠けるところがある。犯罪のスリルが癖になっている、と私は考える。犯罪依存症というべきものだろう。動機について考えると、

スリルのために、モラルがマヒしてしまった彼女は、殺人という重罪にも手を染めたという理由が考えられる。

看護師の職に就いてから約3年後の2014年ごろから、スピリチュアルという、まやかしのなものにはまったり、効果が疑われるダイエットに走ったり、高価な買い物をしたりする、おかしな行動が目立ったり、と周囲から証言されている。不安な心の表れかもしれないし、何かにすがりたい気持ちがあったわけだ。後者は「買い物依存症」的な行動だろう。結局、看護師の仕事はやめた。

結婚後、近所の人の話によると、彼女が姿を見られると、夫の後ろに隠れることがあったという証言がある。それは対人恐怖症的な行動だろう。彼女の精神的状態が疑われるエピソードの一つだろう。

彼女がその老人施設を退職後、他の施設の求人に応募した際の履歴書の志望動機欄に書かれたとされる文書が公開されている。「これまで9年間、自宅で祖母の介護を行ってきました。老人看護・介護について学んでいくうちに施設での仕事に挑戦したいと考えました」

これを読んで私は、自宅での祖父母の介護を経験し

て彼女は「介護される人は早く死ねばいい」と思うようになったのか、とも考えたのだけれど、それは思い直して、それはウソだろうと考えるに至った。彼女が9年間自宅にいたわけではないし、介護については「挑戦済み」だろう。こんなウソはささいなことだが、結局、殺人事件につながっているのだから、「ウソは〇〇〇の始まり」ということだろう。

ストレスの多い看護の仕事をしたことで、心の病を負ったのかもしれない。彼女は、看護師の仕事は自分には勤まらないと思っただから、介護の道を選んだのだろうが、そんな性癖が身についた彼女にとって、その介護の仕事をするのは危なすぎた。彼女の奇妙な行動は、看護師時代の精神的なダメージ（PTSDか？）が尾を引いていると私は推測してしまうが、どうだろうか。

##### ⑤ 大阪北新地のクリニック炎上

【毎日新聞夕刊 2021/12/17 一面】

大阪ビル火災、放火の疑い、17日午前10時20分ごろ119番が入った。燃えた4階には心療内科のクリニックが入っている。】



【毎日新聞夕刊 2021/12/18 社会】

大阪市北区曾根崎新地の雑居ビル「西梅田」ころとからだのクリニック」は約80平方メートル、東西に細長い構造。正午からの予約を入れていた男性「院長さんは優しく、トラブルがあったとは思えない」】

【毎日新聞朝刊 2021/12/19 一面、総合、社会】

大阪医院放火、現場に液体入り袋が複数あった。持参した男性は61歳患者。現場クリニックから西へ約3.5キロの3階建て民家で一人暮らしだった。クリニック放火事件の約30分前に2階の床の一部が焼ける火災が起きた。近所の60歳女性「ずっと空き家だったが、この1カ月ぐらいは男性が入りしていた。自転車で出かける姿をたまに見かけた」

発達障害でクリニックに通っていた男性「先生には本当に助けてもらい、自分の人生で大きな存在だったのに。先生は自分の人生を変えてくれたし、ほかにも助けられた人はたくさんいる」

リワークプログラムと呼ばれる講座が開かれていた。休職中の人らが職場復帰に向け、テーマごとに意見を交換したり、痛みや復職に向けた知識を学んだりする場だった。グループワークもあり、多いときは約20人が参加していた。クリニックに約600人が通院し

ていたという。院長と交流のあった障害者雇用支援会社の鈴木慶太さんによると、院長は元々内科の診療をしていたが、精神的に不調になる会社員らを多く診察し、心療内科の診療を始めたという。】

【読売新聞朝刊 2021/12/20 一面、社会】

大阪ビル放火、容疑者は自ら炎の中に入るところが監視カメラに映されていた。容疑者の診察カードが入った財布が落ちていた。離婚後生活が荒れる。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/24 社会】

谷本容疑者は2011年春、別れた家族を道連れにしようとする計画。元妻宅で長男を包丁で襲い、大けがをさせた。元妻や次男も殺害しようとしたが、長男に抵抗されたため、自転車で逃げ出した後に逮捕された。このとき包丁3本、スタンガン、催涙スプレー、ハンマーを持参していた。「誰かを殺せば死ぬるのではないか。家族は一緒になければならぬから、道連れにしよう」という思いが無理心中へと突き動かしたとされた。谷本容疑者の当時の弁護士は精神疾患による影響の可能性も訴えたが、認められなかった。】

【週刊文春 2021年12月30日ー1月6日合併号 北新地、暗黒の金曜日】

中学の同級生「谷本は目立たず、いつも孤独だった」淀川区の長屋（3階建てのアパート）の1階に住む近隣住民「1〜2カ月前に引越してきた谷本さん、目つきが悪くて常に何かを恐れているような、ちよつと不審な感じがしていました」

クリニック元スタッフ「いつもお酒のにおいを漂わせているので、600人いる患者さんの中でも、記憶に残っています」

クリニックでは、混雑時の診療時間は1人2〜3分だった。「『薬、変えましょうか』『分量を増やしましょうか』とパツパツと診察する。物腰が柔らかく優しい先生でした。長く話を聞いてもらいたい患者の中には不満を持つ人もいたかもしれせん」

西沢医師は、内科医である父に「コロナ禍で「ハローワークに出すと給付金が出るから、診断書を書いてほしい」という患者がたくさん来る、と相談していた。

元スタッフ「クリニックはアルコール依存症、薬物依存症の方はお断りしています。だから最初はアルコール依存使用で受診に来たわけではないはず」

谷本の7歳上の兄「一緒にうちで働いていたころ、腕はよかった（建築板金技能一級）。だけど、一人でやるタイプ。あんまり言うことを聞かへんな。上のもの

と一緒にやることは苦手やった。父の死後、財産分与でもめた。谷本は酒が入ると、家庭で暴れた。とりわけ妻に向けられた」

2002年3月に就職した大阪市内の板金工場の社長は、谷本の短気な性格と、社交性の欠如を指摘した。

「谷本は何か指摘されると、『最初からそういうふう言ってなかったやろ』と、かっとなるところがあつた」  
「寡黙な男で周囲ともプライベートでの付き合いはない。趣味の話は競馬ぐらいのものだった」  
休むことが多くなり、2008年7月にそこを退職。

このころ、飲酒にまつわる妻とのトラブルが頻発していた。長兄「盛雄が夜中に酒を飲んで、嫁さんと喧嘩して暴れた。嫁さんから電話があつて仲裁に入った」

2008年9月に、離婚。  
社長「奥さんに未練があつて『復縁の話はしたけれど、受け付けてくんなかつた』」

2011年4月の心中未遂事件での供述、谷本「一人で死ぬのは怖い。自殺するときは、元妻に迷惑をかけている長男を道連れにしたる。ついでに元妻も次男も道連れや」

【週刊新潮2021年12月30日〜1月6日合併号 良心の医師ら25人が犠牲に、拡大自殺の不条理

クリニックには、心の病で休職し、復職を志す人たちが数多く通院していた。患者の一人「(医院長は)自分の存在を認めてくれた。こまやかな心遣いがあった。自分がたかった」「納得がいくまで穏やかな口調で丁寧に説明してくださいました」

谷本盛雄が西淀川区姫島で持ち家に住むようになったころ、酒屋の主人「仲のよい夫婦だったと思うよ。悪い話は子どもが少しやんちゃだと聞いたぐらいだ」

その後、退職し、離婚した。谷本は自殺を考えるようになり、「一人では死ねない」と、道連れを考えたと

2011年4月、長男から家族4人で映画に行こうと誘われると、これを一家心中の好機とした。

その夜、長男と二人で居酒屋に行き、飲み明かしたが、明け方、いったん自宅に戻って、凶器類を携えてから、元妻のマンションに押し込んだ。谷本は長男の頭や肩に出刃包丁を複数回突き刺したが、長男の抵抗にあい、外に押し出された。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/31 一面

医院放火の容疑者死亡、30日午後7時ごろ。犠牲者の知人やクリニックの患者らは「あまりにも身勝手だ」と容疑者への憤りと、真相究明が遠のいたことへの無念の声が広がった。】

## 1. 挫折

容疑者・谷本盛雄(61)の人生は、茨いばの道だったようだ。孤独で物静かな男だったが、他人に注意されたりすると、たびたび激怒した。社交性・協調性がなく、昔かたぎの職人として生きてきたが、それでは世の中の流れに対応できない。雇われた身では、一人で仕事をしていいわけがない。自己流でやってはいけない。板金の仕事にしても、技術は日々進歩し、新しい材料や作業方法が変わるから、注意されたり、指導されたりもするだろう。彼は仕事上のことで他人に指摘されたりすると、そのたびに顔を赤くして、くっつかかったというから、敬遠されてしまう。同僚や上司との関係をうまくやって行かなければならないが、谷本にはそれが苦手だったとされる。

社交性がないから、家庭でもトラブルになったのだろう。恋愛して結婚したけれど、妻や二人の息子たちと、結局うまくやっていけなかった。職場でいやな思いをして、家庭内で鬱憤ふんを晴らそうとしたのだろう。特に妻に当たった。「酒を飲んで暴れた」ことが続いたというから、アルコール依存症になったと考える行動だった。家庭内DV(ドメスティック・バイオレン

ス)の典型だろう。とうとう妻に見切りをつけられた。

谷本の兄弟とは、父の死に伴う遺産相続で、もめた。谷本盛雄が求めた文化住宅(賃貸アパート)の所有では、兄弟で折り合いがつかなかった。将来的な家賃収入をどう評価するかが問題だったようだ。結局、盛雄が得たが、互いに禍根を残す形になった。むくれた兄たちとも疎遠になった。

2008年9月離婚、新居として建てた3階建ての住宅から妻と子どもたちは出て行った。家庭を失い、谷本はますます荒れた。競馬にのめりこみ、貯蓄をつぎ込んだとされる。税金を滞納するほどだから、生活が破綻した。遺産として得た文化住宅さえ、税務署に差し押さえられた。

## 2. 心中未遂事件

2011年4月、谷本は他人を巻き添えにする自殺を計画した。一家心中を思いつく。一家といっても、もう他人だったのに……。離婚した元妻と息子2人を手にかけてしようとした。

このときも谷本は「一人では死ねない」という思いがあったとされる。人を殺して自分も死ぬことに、願

望があったことになる。もう後戻りできないぎりぎりの立場に自分を追い込む……。

ずさんだ生活をしていた谷本を元気づけるためだろう、もう成人になっていた長男の発案で元の一家そろって映画を見に行く機会があった。その予定された日に、谷本は心中を決行する計画を進めた。

当日、久しぶりに再会し和やかな時を過ごした。そしてその夜は長男と飲み明かした。そこで何が語られたのか、興味深い。

おそらく谷本は自分の嫌な性格を、心身の不調を、不遇な自分を、そして世間の意地悪さ・せちがらさを、ぼやきまくったのかもしれない。珍しく父が長話するのを、長男は聞き流す……。

谷本「ワイはいつ死んでもええんよ」と、本音を漏らしたかもしれない。長男「死んだら、墓ないよ」と、ダジャレで対応したりして……。かれらは、谷本の本家の墓に入れないことがわかっていた。

打ち解けた話をしたかもしれないが、それでも谷本の殺意は消えなかった。(ここいつらと一緒に死のう)いったん自宅に戻って、そのために前もって買い揃えていた凶器類(包丁3本、スタンガン、催涙スプレー、ハンマー)を自転車に積み込み、元妻宅に乗り込ん

だ。

この心中の試みは、やんちゃだった（けんか慣れしていた？）長男の必死の反撃にあい、失敗した。玄関から外に押し出された。住宅の中は、血が飛び散り、物が倒れたり壊れたりして、すさまじい状況だったという。

その後、谷本は逮捕され、懲役4年の刑罰を食らった。長男を包丁で数力所傷を負わせたこと、3人を計画的に殺そうとしたこと、凶器を集め持っていたことの罪が問われたのに、この量刑は比較的軽かったと言われている。終身刑にされても、おかしくはないところだろう。よくある家庭のDVの一つだとして甘くみられ、裁定がゆるかったのかもしれない。

### 3. 北新地のクリニック

刑期を終えた後、谷本は更生できなかったようだ。酒を飲んで酔いつぶれた。アルコール依存症が再発した。競馬にのめり込み、経済的に苦しくなる。ギャンブル依存症だ。借金をこしらえたことだろう。借金の取り立ては厳しいといわれる。常におどおど、隠れるような生活をしなければならぬ。

谷本の文化住宅（アパート）は、税金を滞納し、差

し押さえられていた。その税金分をようやく払い終え、谷本が入居できるようになったのは、事件の数カ月ほど前だった。そして、ここを拠点にクリニックに行き来する。

谷本は、自分の神経・精神の不調を自覚し、いくつかのクリニックを訪れ、治療を期待した。でも、谷本の症状（主にアルコール依存症）は、改善しなかったようだ。そもそも人間関係がうまくいかないことから、谷本には幼いころから発達障害があったのかもしれない。

「西梅田こころとからだのクリニック」は評判の良い医院であり、大勢の患者が詰めかけていたという。600人の人が通っていたというから、いくら心の優しい医師だったにしても、一人一人の診察時間は短くなる。谷本は、それに不満を持った一人だったのかもしれない。待合室で長いこと待たされ、診察時間はほんの数分で終わり、薬を処方されるだけ。「金欠」でもある谷本にとっては、薬代もばかにならなかったことだろう。電子カルテによると、谷本は17年3月からこの医院に通い始め、100回以上受診していた。犯行の直前まで通っていたから、ひいきにしていたのだろう。

医院でのトラブルは記録されていないというが、谷本は、ハローワークに出すための「診断書」が欲しかった可能性が高い。医院長は、谷本が求める病名での診断書を書かなかったことで、恨まれた可能性がある。

谷本が、この医院長と、悩める患者たちを一まとめにして「いっしょに死のう」と計画し、実行したのが今回の事件だろう。できるだけ多くの人を巻き添えにしようと、患者が多く集まる日を選んで計画していたことが分かっている。

医院の入っていた建屋は、エレベーターと階段がいか所集まっており、窓も開けられない構造になっていたから、谷本にとっては都合がよかった。

いっしょに死のうとするなら、彼らの自由意思で、それぞれの合意をとってから行うのが最低限のマナーだろう。

#### 4. 元妻への風当たり

元妻の言い分が、みえない。顔写真ひとつ、出てこない。各マスメディアが元妻の証言を得ようとしたはずだが、どこも得られていないようだ。彼女が徹底的に取材を拒否していると考えられる。

離婚後、谷本の生活が荒れた。また谷本が復縁を求めたのに、元妻は拒否したことから、世の人々の中には「あのとき復縁していれば、谷本は事件を起こさなかった」という思惑が生じることだろう。事件の遠因が離婚にあると考えられてしまっている。

元妻へのバッシングが集中することだろう。特に犠牲者たちの遺族が、谷本の死亡で、ことさら元妻に説明を求めそうだ。「あなた、なぜ離婚したのよお」というきつい調子で。

しかし、元妻にとって「なぜ離婚したか？なぜ復縁しなかったか？」と詰問されることは脅威であり、迷惑なことだろう。〈その理由を語っても、理解してもらえない。すべて言い訳に聞こえてしまう〉ことがわかつている。

彼女にとって、谷本との出会い（看護師と、けがを負った患者だった）が、不幸の第一歩だったのかもしれない。夫のDVは、結婚する前ではわからない。長男が少年時代やんちゃだったから、彼女は子育てにも悩まされた、という証言もある。社会性がなく、自分の仕事が続けられない谷本と家庭を持つことに、無理があったのかもしれない。

この家族は、2011年の心中未遂事件の後、〈オ

ヤジがまた包丁を持って襲ってくるかもしれない、こないオヤジだから」という恐怖感を抱き続けていたはずだ。大阪北新地の事件で、ようやくその脅威はなくなつた。

## ⑥ 横浜地下鉄内で2人の女性を殴りつけた女

【毎日新聞朝刊 2021/12/30 社会】

12月21日、横浜地下鉄（ブルーライン）電車内で2人が殴打された事件で、目撃者が現れない。被害者たちはスマホを操作したり下を向いていたりして容疑者の接近に気づかず顔を見ていない。殴られた後、あつげにとられ、容疑者の後姿を見送った。車両内には防犯カメラはなかった。容疑者は身長150センチ前後、黒髪、60代の女。服装については「茶色のコート」「黒色のジャンパー」と食い違う。ブルーラインの改札やホーム、エレベーターには防犯カメラが計581台あるが、容疑者の特徴がわからず、警察は追うべき人物を絞り込んでいない。】

地下鉄車両内で、60代の女が向かいの席に座っていた二人の女性の頭を金づちのようなもので、いきな

り殴りつけた。被害者たちは呆然として声も上げられなかった。犯人は無言で、すぐにその場を離れ別の車両に移動していったから、被害者たちはその後姿を見ただけだった。彼女たちは頭に傷を負い（軽傷だったらしい）、次の駅で降り、被害を届け出たが、警察の捜査は困難になっているという。もしも解決しないとすれば、かなり珍しいケースになるだろう。

被害の二人の女性が加害者の後姿を見ているのだが、その服装についての証言が微妙に異なるなど、はっきりしていないから、容疑者の特定が難しい。同じ車両内に他の乗客も何人かいたが、目撃証言が得られていない。地下鉄内は比較的暗いし、騒音も大きい。乗客たちは、他人のことに関心がない人たちがばかりだったのだろう。事件を見てなかったわけだ。あるいは見えて見ぬふりをしていた。（自分が巻き添えになって、金づちで叩かれてはたまらない。いまさら警察に行つて、証言するのも面倒だ、などと思う）

車内に防犯カメラがなかったことが、捜査関係者の間で、悔やまれている。列車内の犯罪が目立ってきたから、今後、車内に防犯カメラを取り付けることが加速されそうだ。

しかしながら、駅構内や改札口では、多くの防犯カ

メラが目を光らせているから、容疑者らしい人物が何個所かで写されているはずで、時刻と照らし合わせてある程度、絞り込めそうだ。二人の被害者の証言がいまいでは、特定が難しいようだ。同じような年配や服装をした人物がいたとしても、顔を識別できないのでは、逮捕するわけにいかないだろう。逮捕状を取るだけの証拠になりそうもない。

なぜ、女は初対面の、同じ地下鉄の車両に乗り合わせた女性たちを殴りつけたのか、想像するしかない。

——女は、二人を見ていると、むらむらと腹立たしくなった。へのほんとしているこいつらに、カツを入れてやろう！と思うようになった。

二人とも、何の苦勞もないように、のんきに座席に座っている。一人は若い女で、スマホに見入りながら指で操作している。もう一人は初老の女で下を向いて半分眠っている。それに引き換え、自分はどうだ。不安な毎日を送っている。一日一日を生きるのがやっとだ。十分な収入もなく、切り詰めた生活を強いられている。老後、どうやって過ごそうか、心配になっている。職場にいけば、口うるさい上司にこき使われ、家に帰れば、だらしないう夫、ろくでもない子どもらがい、いらだつことばかりだ。どうにもならない。どい

つもこいつも、いらだたい

女の上着のポケットには、たまたま小型の金づちを入れていた。壊れた木製家具を修理するために持っていた。電車が降車駅に近づいたとき、女は立ち上がった。他の車両に移動するついでに、ポケットから金づちを取り出した。それを握りしめ、へええい、これでもくらえ！（ゴン、ゴン）——

### ⑦ フィギュアスケートはジャンプ競技？

【毎日新聞夕刊 2021/12/21 総合】

紀平、五輪出場は絶望的。右足首のけがから復帰を目指していた。紀平はトリプルアクセル（3回転半ジャンプ）を武器に優勝、昨年12月の全日本選手権でシニアの日本女子では初めて4回転サルコーを成功させた。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/22 スポーツ】

あすから全日本フィギュア、紀平は欠場、五輪絶望的。11月のNHK杯直前の練習で負傷。右足関節人体損傷と診断された。クワッドアクセル（4回転半ジャンプ）に挑戦する。】

【毎日新聞夕刊 2021/12/24 総合】



フィギュアスケートの選手にとって靴のブレード(刃)は演技を支える。しかし、ジャンプを着氷する際の衝撃で曲がったり、時々折れたりすることがあった。日本のメーカーが特殊鋼を使い、溶接せずに鋼の塊からブレードを削りだす(曲がらないブレード)を開発した。】

【読売新聞朝刊 2021/12/25 スポーツ】

全日本フィギュア、羽生はけが明け初戦で、会心の首位。冒頭の4回転サルコーで高い出来栄え点を得ると、4回転-3回転の連続トーループも耐えた。最後のトリプルアクセル(3回転半ジャンプ)も決めた。

宇野昌磨は冒頭の4回転フリップをきっちり成功。数日前に4回転フリップの練習で右足首をひねった。本当は右足の負担が少ないサルコーへの変更を考えた。ランビエルコーチの後押しもあり、より基礎点の高いフリップに挑んだ。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/27 スポーツ、社会】

羽生連覇、前人未到の4回転半ジャンプに挑んだが、両足着氷で減点。

過去にチャレンジしたときは、いずれも「ドン」という音が会場に響き、羽生が氷に打ち付けられるように転倒する場面が多かった。】

【毎日新聞夕刊 2021/12/28 総合】

羽生、4回転半、鍵は角度と軸。専門家「幅跳びしつつ背面跳びする」

高い身体能力が羽生の世界初の成功に向けた挑戦を支えている。】

フィギュアスケートの競技会において、多回転ジャンプは、高度な技として基礎点が高い。しかし、これは行き過ぎの感があり、見直すべきだろう。選手たちが危ない技に挑んでいることはよくない。現実に、それだけがをした有力選手が多い。そもそも氷上でジャンプして、空中で高速回転することに意味があるのか、疑問を呈したい。

多回転ジャンプに成功すれば、高得点、失敗すれば「痛い」ことになるから、はらはらどきどきの世界だ。コーチ以外誰も見ていないところでも、その練習が行われる。それによって、有力選手が次々に傷つき、大事な競技にも出られなくなっている。多回転ジャンプは、選手生命をかけた挑戦になっている。高回転ジャンプは、過度な期待を背負わせて、選手を追い詰めている。それは華麗なスケートティングを競うことから、逸脱してはいないだろうか。

紀平選手は、その後のニュースで、右足首の故障を「疲労骨折」と打ち明けたことが報道された。長距離ランナーに時々それが発症することがあると聞いているが、フィギアスケートで疲労骨折とは、驚かされる。

原因として思い当たるのは、回転ジャンプだ。ジャンプして体をコマのように回転させる技だ。一般の人が、練習として単にジャンプだけ試みても、失敗して腰を打つのが関の山だろう。成功するために、何度やるべきか、わからない。冷たく硬い氷上で、転ぶことは危険だろうし、ぶざまだ。選手が転ぶ姿はだれも見たくない。

空中で何回転するかが競われている。回転を多くするためには、できるだけ高くジャンプしなければならぬし、その分、着氷時に、足に強い力が加わるのが容易に考えられる。着氷時の衝撃が大きい。その音も、びっくりするほど大きい、「グジャン」。そして、選手が転ぶときの、「ドスン」

足に負担がかかる。ケガのリスクがあるけれど、選手たちは高得点を得るために、ジャンプする。コーチがそれをそのかす……。なんと、スケート靴の金属ブレードが曲がったり折れたりするという。それでは、

足の骨が折れるのは当然だろう。

そもそも、高速回転しているものだから、一般の観客には回転数など数えられない。目にも止まらない回転など、もうどうでもよくなる。リングサイドで、じっと見ている審査員には、見分けられるかもしれないが、多くの観客にはおそらくわからない。つまり、専門的な目でしか判別できないレベルになっている。観客は、解説者の説明によって、その回転ジャンプが、「三回転半」あるいは「四回転」だったことを知ることになる。

今、世界的に最難度の技、四回転サルコーなどは、のるかそるか、大技の部類だろう。成功したら、上位入賞、優勝も望めるが、失敗したら、無様な格好を見せ、高得点は望めない。人々が選手たちに大技に挑むことをあおる傾向がある。

その高度な技は曲芸ともいえそうだ。スポーツから逸脱することだろう。体操競技にも、同様なことが言える。見ている側がすごいと思うような「技」を繰り出して、得点を積み上げようとしている。

これが選手たちに無理を強いている。高速回転するためには、体重が軽いほうが有利だから、コーチなどが、あるいは自分自身が減量を強いていることも、考

えられる。年少の女子選手は、成長するにつれ、高速回転ができなくなつてゆく。その焦りが、体を壊す原因になりうる。選手たちの多くは未成年で、少年少女であり、危険な技に挑んでいる姿は涙ぐましい。

回転ジャンプの基礎点が選手たちに無理をさせている。難易度の高い技を競わせることは、選手としての寿命を縮めている。選手にけがをさせるリスクがあるとなれば、フィギュアスケートで回転数の高さを競うのは、そろそろやめるべきだろう。三回転まででよい。

禁止せずとも、採点を積み上げる仕組み（技の難易度によって基礎点が与えられる）をやめればよいことだ。例えば、三回転以上は、もう加算の対象にせず、他と同じにする。それ以上は回りたい者だけ回ればよい。回転したければ、ジャンプせずとも、氷上にプレードの先を接したまま、回転すればよいだけの話だ。氷上に穴があくだろうけれど。

⑧ 中国幹部との不倫を告発した女子選手の変節

【毎日新聞夕刊 2021/11/4 国際

中国テニス選手・彭帥さん（35）がSNSに投稿し、

元副首相・張高麗氏との不倫を告白。張高麗氏は共産党最高指導部のメンバーだった。今月2日に張氏が関係を終わらせようとしたことを示唆した。「遊ぶだけ遊んで要らなくなった」「私の自業自得」と後悔の念を吐露した。即座に削除されたが、インターネット上で内容が拡散した。張氏は2012年から2017年まで、共産党の最高指導部の政治局常務理事を務めた。彭帥さんはウインブルドン選手権と全仏オープンの子ダブルスで優勝した。党指導部の威信に傷がつきそうだ。】

【毎日新聞夕刊 2021/11/20 総合

国連人権高等弁務官事務所は、不倫関係を告白し、行方の分からなくなった彭帥さんの明確な所在確認を求めた。】

【毎日新聞夕刊 2021/11/22 総合

中国の不明のテニス選手、「北京の自宅で元氣」、バツハ会長と通話。中国政府が沈静化を狙う？】

【読売新聞朝刊 2021/11/23 国際

彭帥さん「安全」宣伝戦。バツハ会長と通話。

習政権は北京五輪影響への回避を図る。国外向け投稿と、国内は統制。中国の検索サイトでは彭さんと張氏の名前を同時に検索すると細目は表示されない状態に

なる。」

【毎日新聞夕刊 2021/11/24 総合】

世界女子テニス協会(WTA)の公式ツイッターから、「彭帥はどこ」というハッシュタグ(#WHEREISPENGSHUI)をつけた投稿が広がっている。WTAのトップは中国市場からの撤退も辞さない構えを示した。」

【読売新聞朝刊 2021/11/25 木語】

性暴力を告発する#MeToo運動、彭帥さんが張高麗元副首相と長年の不倫関係や性的関係の強要があったことを告発した問題。常務委員の経験者は「聖域」とされる。中国国内ではなかったことにされた。」

【「ネット情報より」NHKニュース 2021/11/28 中国女子テニス選手】

中国SNS・ウェイボーに投稿された文書…※ポイントのみ抜き出していて、省略した部分を／／で表記。

「うまく言えないのは分かっている。言ってもしかなかったことも。でもやはり言っておきたい／／約3年前、張高麗副首相は退職し、天津テニスセンターの人を通じて、再び私に連絡してきた。北京でテニスと一緒にやろうと。午前中にテニスをしたあと、あなたと夫人は私を連れて、あなたの家に行った。その時、あなた

は私を部屋に引き入れ、10数年前の天津の時と同様、私と性的な関係を結んだ。／／あの日の午後、私はとても怖かった。あんなふうになるとは思ってもみなかった。／／「年前に私たちは、性的関係を持った。その後、あなたは政治局常務委員に昇進して北京へ行き、私との連絡を絶った。私はすべてを心の中にしまった。あなたは責任を取ろうとしなかったのに、なぜ、再び連絡してきたのか。そしてなぜ私を家に連れて行き、関係を迫ってきたのか?／／あの日の午後、私は全く同意していなかった。それでずっと泣いていた。／／私は、たとえようもないほど惨めな存在だ。私は常々、「自分は人間だろうか」と自問していた。まるで自分が歩く屍のようだとも感じていた。／／地位の高い張高麗副首相は、恐れてはいないとおっしゃった。でも私は、たとえ石にぶち当たる卵となっても、火に飛び入る蛾となり自滅しても、あなたとの間にあった事実を明らかにする」】

【読売新聞朝刊 2021/11/29 国際】

中国・人権派弁護士梁小軍(リャンシャオジュン)の資格を取り消した。彼は人権問題に積極的に情報発信してきた数少ない弁護士の一人だった。当局は梁氏が「憲法と法律が確立した根本制度と基本原則をけなし

た」などと批判した。梁市は人権問題について、今月18日には、元政府高官から同意の内省的関係を迫られたと告発した彭帥さんや獄中から無実を訴える女性人権活動家・張展さんの写真をツイッターで投稿し、「彼女たちは世界に勇気を与えた」とたたえた。」

【毎日新聞夕刊 2021/12/2 総合】

女子テニス協会（WTA）は彭帥さんの問題で中国での全大会を中止。WTAのステイブ・サイモンCEO「権力者が女性の声を抑圧し、性的暴行の疑惑を隠蔽できるなら、WTAの基本原則である女性の平等は大きく後退する。」

【毎日新聞夕刊 2021/12/10 総合】

テレビ電話で彭帥さんと歓談したIOCのバッハ会長は、彭さんとは面識がなかったことを明らかにした。画面越しの人物が彭さん以外である可能性について、（同席者を含む）だれ一人として疑うことはなかった。彼女が自分の人生について語る様子からも明白だとする。」

【毎日新聞夕刊 2021/12/15 総合】

中国、禁止情報を掲載したことで微博に罰金を課した。IT規制強化か。具体的にどのケースが問題とされたのかは不明。11月に女子テニス選手の告白も微博で

行われた。」

## 1. 概要

中国の女子プロテニスプレーヤー彭帥（ほうすい Peng Shuai）さん（36。1986年1月8日生まれ）の言動が注目されている。この女子選手が性的関係を迫られた被害者として声を上げたけれども、これを封じ込めようとする威圧的な政治権力が動いたとみられる。中国では究極の隠ぺい体質があり、その情報統制力は強い。

彼女は実績のあるテニスプレーヤーだ。近年は主要な大会に出ていないが、輝かしい実績があり、中国のテニスブームの草分け的存在だろう。国際舞台で活躍していた国民的英雄だ。

相手は中国共産党最高幹部の一人だった、元副首相・張高麗（75）だ。〈中国共産党幹部の恥をさらしてはならぬ〉という中国政府の強い姿勢が見えている。中国では幹部たちにスキャンダルがあつてはならないことだろう。習近平国家主席の権威がすこし揺らぎかねない。習近平に近い人物だったともいわれている。

告白後、3週間近く行方が分からなくなった。中国での失踪は、まず当局の関与が疑われる。政府を批判するような人物、特にジャーナリストや人権活動家な

どは、次々に拘束され、拷問にかけられたり、長時間・長い月日に渡って尋問を受けたたりすることが知られている。当局に誘導され、不本意な自供させられる例が多い。

今回の失踪も、中国当局の関与が強く疑われる。告白によって注目され、この失踪が国際社会に知れ渡り、その安否が心配された。

しばらくしてから、姿を現し、別人のような言動をし始めた。わざとらしい会見の映像で、性的関係について知らぬ存ぜずの表明をするのだから、ますます怪しい。当局の監視下であり、特別な報道機関しか接触は許されない状況がみてとれる。

IOCのバツハ会長との会談にしても、互いに面識がないのに、不急不要の会話をしているのは、わざとらしい。外国メディアとして初めてインタビュースタール記者の前で、聞かれてもいないのに、今回の告白について全面否定するコメントを付け足していた。「性的関係を迫られたことなど言ったこともないし、書いたこともない」とは、言わされた感が強い。

ただし、その公表された動画を見て、専門家の中には、いいにくさを態度で表していたと指摘する向きも

ある。言葉で否定しても、態度がその性的関係を肯定しているというのだ。

女子テニス協会(WTA)が、それらの映像でも疑惑が晴れないとし、中国当局の一連の抑圧的・強引なやり方を問題視し、中国での大会すべてを中止にしたのだから、影響は大きい。

欧米では、一人の女性の性的被害についての告発をきっかけとして、「私もよ」「私もよ」の連鎖が起きたことが記憶に新しい。#MeToo運動が盛り上がった。地位や立場を利用して、性的関係を迫るケースが、次々に明るみに出ている。暴露されると、社会的名声が失墜するだけでなく、告訴されたり法廷で損害賠償まで迫られたりする……。男にとつては「受難の季節」になったのかもしれない。

なお、今回の重要な当事者、張高麗は沈黙を守っている。張高麗にインタビュールできた報道機関も皆無だ。中国らしい対応だろう。

## 2. 性的関係

不倫のきっかけは、2010年前後に天津市で、張高麗が「天津市党委書記」の要職にあつたとき、彭帥を見初めた、とされる。張高麗は、もうすでに有名に

なっていた彭帥に性的な関係を持つことを迫った。権力者に対して、拒否できないのが、中国人民の弱さだろう。悲しいところかもしれない。

中国国内において、政治的権力者がその権力を利用して気に入った女性に性的関係を迫ることは、常識化されているという。人民の間で「暗黙の了承」ということだ。彭帥としても、声をかけられたら、やむをえないことだろう。性的関係を迫られたわけだが、手籠めにするというような強引さはなく、同意に近い形だろう。ただし、世間に知られるとスキャンダルになるから、内密に行われるのが鉄則だろう。仲を取り持つ人がいたはずだが、彼らも了承済みということだろう。

張高麗と彼女は愛人関係になった。2010年前後といえ、彭帥はプロテンスプレーヤーとして絶頂期にあり、公私ともに忙しかったことだろう。権力氏との愛人関係は、不倫というより、取引に近いことだろう。だから、彭帥が「強要されたわけではない」というのは真実かもしれない。

張高麗が2013〜2018年の間、北京で副首相の要職についていたとき、関係は途絶えていた。引退してからは、また、不倫関係が始まった。腐れ縁的だ。

張高麗は自宅に彭帥を呼んで、その妻も認める性的行為をするようになった。この時、張高麗は政治的権力をもたず、もう「ふつうのおじさん」だったから、気兼ねなく断れたはずだが、男の誘いを拒めない女心があったのかもしれない。

11月2日に約束していた逢瀬が取りやめられた。ドタキャンだったとされる。

### 3. 告白した動機

彭帥は「捨てられた」と認識し、その不満や不平を、文書に書き連ねたわけだろう。かなり長い文章になっていた。要は、失意を表したものだ。

前掲した告白文を読むと、愚痴やぼやきが多いことに気づく。話し言葉の調子で「私とあなた」と表記し、相手をなじるとともに、過去を振り返りながら、自分の行為を悔やむ言葉を連ねている。このこと（不倫）をみんなに知ってもらいたいと考えて書いた文書というより、「あなた」に対して恨み言を書いていることに注目したい。

この中に「全く同意していなかった」という言葉がある。張高麗が北京から帰り、よりを戻した時のことだ。彭帥が張高麗の自宅に招かれたのは、久しぶりの

再会であり、以前のよしみがあつて、歓待されるだけと思つていたのだろう。まさか、夫人のいる自宅の一室でいきなり性行為に及ぶとは考えていなかったから、その表現になつたものだろう。同意していなかつたけれども、拒否もしなかつたわけだろう。

その後、関係は続いたが、11月2日に張氏に別離を告げられた際、別れ話に動揺したのだ。

長いつぶやきの文書をウェイボーに投稿したのだから、またたく間に世界に広がった。自分の思いを語るにしても、これは大きなチョンボ（失策）だろう。内密にする鉄則を忘れて、言いたいことを言つてしまつている。ラケットをコートに叩きつけて、試合をぶち壊してしまつた行為に似ている。本来、これはメールで親書として張高麗本人あてに発信すべきものだ。

#### 4. 失踪の謎 その一

なぜ3週間近く失踪していたか、いくつかの解釈をすることが出来る。

一つは、情報統制する中国当局が怒りまくつたことが考えられる。

この投稿にネットを監視する当局がすぐに気づいた。この投稿を20分後に削除したとされるが、その間、

ネットにかなり拡散したわけだ。当局が、それらや関連投稿を削除しまくつても、もう遅いのだ。国際的にマスメディアが聞きつけて、広く報道する事態になつた。

この投稿を知つた幹部連中は怒つたことだろう。権力者たちの逆鱗に触れたことになる。彼女は密告者として扱われるだろう。「国家体制」の秘密をばらしたのだ。共産党幹部のスキャンダルなど、絶対のタブーだ。個人の問題に留まらず、党の威信にもかかわる重大事だろう。共産党の恥になる。副首相だつた張高麗はすでに引退し、政治力はないにしても、輝かしい経歴に傷がつく事態だ。

すぐさま、その投稿を削除したのは、情報統制の厳しい中国らしい対応だ。しかし、それでも間に合はず、その情報が漏れ出たから、彼らにとつて、たいへんなことだ。情報統制部門の管理者の首が飛ぶかもしれない。

「これはまずい。アイツには、もう公言させるな！何も言わせるな。何事もなかつたようなふりをさせろ！」

権力者たちが黙認するわけがない。幹部連中は、自分にも、権力を傘にして女を手籠めにすることなど、



多少、身に覚えのあることなんだろうから、また同様の件で告発されたらたまらないという思いがあるはずだ。

私が妄想を膨らませて、幹部たちの声を聞いてみよう——「それは自分の恥でもあるだろうに、秘密を公然はばらしたのは、とんでもないアマだ。被害者ぶりやがって……」「あのアマ、元副首相とのスキャンダルを世間に言いふらしやがって、世界で少し位有名になり、ちやほやされて、いい気になったのだろう」「こんな告発は絶対に許さん！」「彼のことだから、それなりに優遇したはずだが……。見返りが少なかつたとしてもいいのか？」「幹部の顔に泥を塗りやがって、そんな告発をしたら、どうなるか、わかっているのか？見せしめにしなければ、示しがつかん！ 第二の告発があつては、たまらんよ」「おい、キサマら、罪状は何でもいいから、とっつかまえて、しぼりあげろ！」「手荒なことをしてもかまわん。焼きを入れてやれ。へらず口をふさいでやれ。ついでに下の口もふさいでやれ！」「あいつには、もうテニスなど、させるな！ プロテニスの資格など、はく奪だ。」

## 5. 失踪の謎 その二

当局は彭帥を連行し、ある場所に隔離した。もう一つの方策として、彭帥を脅したりすかししたりして説得を試みることだ。ただし、手荒なことはしなかつたのみ。説得するために3週間かかったのだろう。私が推測する要点を上げると、

- ・不倫は、秘密にすべきことだ。はつきり言つて、みつももないことだ。秘密をばらすのはいけない。裏切り行為でもある。相手の立場もある。

- ・張高麗氏の名誉に傷がつく。彼はこのことを否定しないし、肯定もしないだろう。彼はもうかなりの高齢だ。性的関係は、体力のあるあなたと違って、いつまでも継続・持続できない。終止符を打つのはやむを得ない。

- ・この告白は、あなたの恥でもあること。妻子のある男性との不倫関係をわざわざ世間に知らせた。これはあなたにとつて何の得にもならない。

- ・張氏の奥さんは、わかつていたけれど、黙認していた。いろいろ考へてのことだ、あなたに対しても恨んではいないし、文句も言わなかつたはず。夫に好きなことをさせるだけの寛容さがある。政治家の妻の鏡だ。

確かに、あなたは性的な被害者だったのかもしれない。

い。張高麗氏のしたことはセクハラだったかもしれない。権力者の前では仕方がなかったことだろう。関係が終わった後に声を上げて、もうセクハラされることはないのだから、意味がない。

• それとも、あなたは何か見返りを期待して告発をしたのか。世間を味方にしたかったのか。同情されなかったのか。不倫のあなたに味方する人がいるだろうか。

• 今、あなたの告白が世界に知れ渡り、問題になっている。中国での国際スポーツの大会の開催が危ぶまれる事態になっている。そうなったら、あなたのせいでもある。

• 我々としては、あなたの告白はなかったことにしたい。どうだろうか、「張高麗氏に性的関係を強要されたことはない」、「性的関係もなかった」と言っ  
てほしい。あなたは張高麗氏の愛人というレッテルを張られないですむ。そのためには、われわれは全面協力しよう。そうすれば、あなたは法に触れることもないし、後ろ指さされることもない。

• 外国の記者からインタビューされると、しつこく追及されたりして大変だろうが、がんばってほしい。

## 6. 彼女の身の上

状況から考えると、「失踪の謎その二」に当てはまりそうだ。説得のための失踪だったと、彭帥さんは監視下に置かれていながらも（自由の身ではない）安全な状態にあると考えられる。彼女は、当局との打ち合わせ通り、性的関係にあつたにしても「強要はなかった」と言い続けるのだろうか。

## ⑨ 中国・台湾侵攻への準備万端

【読売新聞朝刊 2021/1/25 総合、国際

中国船（民間200隻）が台湾離島に大挙してやってきて海砂を大量採取、台湾を挑発、背後に軍がいる。】

【毎日新聞夕刊 2021/3/3 総合

中国、台湾からのパイン輸入停止。蔡政権ら打撃を与え、野党・国民党に有利な世論を醸成する目的がありそうだ。これまで中国からの圧力が強くなれば強くなるほど台湾の民意に「反中」の傾向が広がってきた経緯があり、逆に蔡政権に有利に働く可能性がある。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/5 一面

中国、強大な海軍、膨張加速。2隻同時に建造が進む強襲揚陸艦「075型」、中国上海市で2月撮影の写

真。】

【読売新聞朝刊 2021/4/13 国際

台湾離島・馬祖列島で中国船が大挙して海砂採取、「砂浜が消えた」漁に大打撃。ケーブル切断、騒音で不眠。】

【読売新聞朝刊 2021/4/13 総合

4月12日、中国軍機の台湾防空識別圏進入が常態化した昨年以降、1日に入った機数としては最も多い25機が進入した。戦闘機、爆撃機など。】

【読売新聞朝刊 2021/5/17 スキャナー

中国軍は台湾に照準を合わせている。ミサイルを大量配備し、強襲揚陸艦も就役させている。】

【毎日新聞朝刊 2021/10/6 国際

中国が台湾への威嚇を激化させている。連日、防空圏に軍用機が入る。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/12 国際

中国、タクラマカン砂漠に米空母型の標的物を建設したことが、衛星写真で判明。】

【毎日新聞夕刊 2021/12/28 総合

ニカラグア政府は、台湾の旧大使館を接収した。「所有権は中国にある」

台湾側は強く反発。】

【東京新聞 2022/1/3 国際

台湾、蔡英文総統が談話を発表、「中国の習近平指導部が軍事的圧力を強化している」と非難した上で、「軍事では兩岸の隔たりは決して解決できない」「自由と民主主義を国際社会とともに守る」と強調した。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/5 国際

台湾との関係を強化したリトアニアへ中国が報復を本格化させている。輸入停止、EUに飛び火している。】

「さあ、香港が終わったから、次は台湾だ」という習近平の、威勢のいい声が私の耳に聞こえてくる。習近平は現代の中国皇帝だ。その独裁者の意向（威光？）がますます強まっている。台湾を制して、名実ともに一つの中国の最高指導者として名を残そうとしている。一つの中国を実現することにこだわっている。ここへきて、台湾有事の可能性が一段と高まっている。

「台湾は、自国の固有の領土だ。国民党のやつらが逃げ込んで支配したが、我が国の領土だ。住民が勝手に独立するなど、絶対にさせません！ ヤツらはおとなしく、我々の支配下にはいつていれればいいんだ。このままずるずるの既得権を確立させて、たまるか！ 蔡英文政権

など、圧力をかけてひねりつぶせ！ 大国中国の力を見せつけてやれ。経済力、軍事力をふるえば、台湾など赤子の手をひねる程度のことだが、アメリカが割り込んでくるのが厄介だ。対抗する術はある。作戦を考えて軍事力で圧倒すればいいんだ。だいたいアメリカは部外者だろ？ 他国の内政問題に関わるなかれ」

中国政府は台湾併合を悲願としている。中国が台湾を支配下に入れるために、特に外交面で締め付けを強化している。しかし、香港を見ていると、台湾の人々にすれば、「明日はわが身」の心境だろう。そうとうな脅威だ。

以下に、中国の主なやり方を示そう。

### 1. 貿易や外交面での締め付け・嫌がらせ

祭英文政権の台湾に対して、あからさまな嫌がらせの方策を採っている。たとえば、馬祖列島で中国船が大挙して海砂採取した件も、中国の嫌がらせだ。わざわざ台湾の島々へ行って、海砂を採取する必要性や経済的利得は中国側がない。中国政府が民間に委託してやらせたものだ。

台湾産の農産物に（害虫が見つかった）などといちやもんをつけて、それを輸入禁止にしている。

台湾との外交関係をもつ諸外国に圧力をかけている。次々に外交関係を断ち切っている。台湾と外交関係をもつ国の数を減らしてきた。その方法は、経済的・金融的な支配によるものだったり、援助をちらつかせるものだったりだ。経済的損得を考えると、台湾と親密であった国でさえ、中国よりに傾かざるを得ない。つまり、台湾は外交的なピンチに追い込まれている。

ニカラグアでは、台湾との外交を打ち切り、台湾の大使館だったものを、没収した。中国が後ろで糸を引いていることは見え見えだ。

台湾と新たな外交関係を作ることは、中国政府にとって、とんでもないことだろう。近年、リトアニアがそれをやったから、中国は怒りの鉄拳を振り上げ、貿易を止めるなど、見せしめ的な報復を行っている。ユーロ圏で物価が上昇する一因になりそうだ。

### 2. 武力

台湾海峡を挟んで、本土側の海岸線には、ずらりと砲門やミサイルを並べていることは、よく知られている。東シナ海には、多数の潜水艦を展開していることも確実だ。水中にうようよしている。

近年、中国は、台湾の防衛識別圏にわざと軍用機を

飛ばして進入させている。2021年には、特にその頻度規模を増している。威嚇的・挑発的行為を繰り返している。2021年には中国軍の戦闘機など述べ940機以上が台湾の防空識別圏に侵入したとの新聞報道がある。台湾側はそのたびに緊張させられる。戦闘機をスクランブル発信させている。互いに接近しすぎて、いつ交戦（空中戦）が始まってもおかしくない事態になっている。

台湾侵攻の手始めに、尖閣諸島を占拠する公算もある。中国公船が尖閣諸島の周辺の領海を侵犯する事案が増大している。中国は自国の領海を航行しているのだと思いついでいるから、始末が悪い。「自国の領土である尖閣諸島に上陸しても、何が悪い！」という理屈で、そのうち上陸作戦を決行するだろう。国際的にも、尖閣諸島は領有する国が未定の扱いになっている。中国が実効支配しても、はっきりと国際法違反とはならないだろう。中国は、力の論理（強いものが支配権を握る）で押し切るだろう。

中国が、タクラマカン砂漠に米空母型の標的物を建設したというニュース記事は、興味深い。中国が最も脅威に感じるのは、アメリカの空母を主力とする機動部隊だろう。というより、台湾侵攻のために一番邪魔

な存在だろう。中国にとって台湾侵攻の可否は、アメリカ空母を撃沈できるか否かにかかっている。

空母を模した実物大の構造物を作り、レールの上で動かせるようになってきている。それは、高速で航行する空母を攻撃するための訓練として、また、ミサイル開発のための標的と考えられるのだ。そんな大きなものは、衛星写真にもよく映る。見られていることは、中国としては計算済みのことだろう。〈アメリカ空母が近づいたら撃沈するぞ〉という強い意思表示でもある。

中国軍が海峡を越えて台湾に押し寄せるとき、どこで白旗を揚げるか、蔡英文総統の判断が悩ましいことになる。

⑩ プーチンの野望・ウクライナへ侵攻すること

【読売新聞朝刊 2021/5/31 国際

トルコとウクライナが接近、露に対抗、無人機開発で協力。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/9 一面、カーズグラフ

米露オンライン会議、ウクライナ平行線、緊張緩和、隔たりが大きい。バイデン氏「侵攻なら制裁する」

ロシアは譲歩を引き出す狙い。プーチンは11月末の会議でウクライナのNATO加盟だけでなく、同国へNATOの攻撃的兵器を配備することが「レッドゾーン」(超えてはならない一線)だと主張。プーチン氏は7月に、ロシア人とウクライナ人は同一民族と主張する論文を発表しており、ベラルーシと並んでスラブ系民族が中心のウクライナを自身の勢力圏とみなし、欧米の影響を排除する狙いも浮かび上がる。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/10 国際

ウクライナ情勢を米露NATOの高官が協議開催へ。バイデン氏はプーチン氏に「ウクライナに侵攻すれば、経済制裁を科す」と伝えた。プーチン氏は会談で、ウクライナのNATO加盟や米国の軍事支援に反発し、NATOの東方への不拡大を確約する法的な保証などを求めた。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/18 一面、総合

ロシア軍の大規模な演習、演習名「ザパド」、全体で参加人数約20万人。「まるで戦争前野の状況だ」1発で約2万5000平方メートルの面積を破壊できるミサイル「イスカnder」、無人戦闘車両「ウラン9」

ロシアは「(NATO不拡大を決めた)欧米の裏切り」

に反発、愛国心、新兵器開発。欧米との対立が進む一方で中国と軍事協力を深めている。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/19 国際

ロシア、NATO不拡大を要求、米との条約案を公表し、合意文書案を迫る。】

【毎日新聞夕刊 2021/12/24 総合

プーチン氏はNATO東方拡大をけん制した。会見で、冷戦終結後にNATOが東欧諸国に拡大してきたことについて「だまされた」と述べ、「われわれは米国の国境にミサイルを配備したか。ノーだ。米国が自分のミサイルを持って我々の家の近くまで来た!】

【毎日新聞夕刊 2021/12/23 総合

2014年7月にウクライナ上空で地对空ミサイルで撃墜されたマレーシア航空機の事件で、オランダの裁判所で、殺人罪に問われた元ロシア大佐ら4人に終身刑を求刑した。事件は親露派勢力が一方的に独立宣言したウクライナ東部(ドネツク人民共和国)で発生した。】

【読売新聞朝刊 2021/12/25 国際

ウクライナ軍が演習で、米供与の携帯型対戦車誘導ミサイル「ジャベリン」を試射。】

【東京新聞 2022/1/3 国際

ロシアが「ベラルーシに核配備」をちらつかせている。ウクライナ協議に揺さぶりが。

ベラルーシの外相「NATOがポーランドで兵器配備を進めた場合、わが国は（ロシア製の）核兵器を配備する可能性を検討する」】

【神奈川新聞 2022/1/10 総合

米政府高官は、緊張が高まるウクライナやその周辺での米欧州の軍事演習やミサイル配備の制限はロシアと同様の対応を条件に（ロシアと）交渉可能との考えを示した。ロシアが求める北大西洋条約機構（NATO）のウクライナなどへの不拡大の保証には「決して同意しない」との意向を表明した。さらに、米ロ対話などが行われている間に、ロシア側から、米国が譲歩したという情報操作が行われている可能性があること、（ロシアに）強い不信感を示した。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/9 国際

ウクライナはNATOの加盟国ではないが、将来的な加盟を念頭に置いた「パートナー国」に位置づけられている。ロシアはNATOをウクライナなどに拡大しないことを「法的に保証」するよう求めているが、NATOのストルテンベルグ事務総長は「加盟するかしないかはそれぞれの独立国が民主的プロセスに基づい

て自由に決めるもの」と語り、要求は受け入れられないと主張した。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/9 国際

NATOとロシアが理事会を1月12日に開催し、ウクライナ問題について協議を始めた。ロシア軍は11日、ウクライナ国境付近の複数の地域で3000人規模の軍事演習を実施し、強硬姿勢を示した。】

ウクライナがNATO加盟の動きを見せると、プーチンが怒った（怒ったふりをしている？）。「NATOはレッドゾーンを超えたのだ」と表現する。怒った彼はロシア軍の大部隊を動かし、ウクライナ国境に集結させた。あきらかに、ウクライナ侵攻をもくろんだ動きだ。

2014年のクリミア併合・ウクライナ東部の占拠以来の軍事行動だ。プーチンは。それに飽き足らず、さらにウクライナ内部深くに侵攻する動きを見せている。

プーチンの言い分としては、NATOの不拡大は、ヨーロッパの国々の間で確認された約束事であるとす。いつ約束したことなのだろうか。今後、ロシアが提案した案に基づき、正式に条約の形で合意されるべ

きものだろう。ただし、欧米側は「そんな不拡大は保証できない」として突っぱねている。

ともあれ、近年NATOは拡大している。1999年には、ポーランド、チェコ、ハンガリーが加わり、19カ国となった。2004年にはさらに、ラトビア、エストニア、リトアニアのバルト三国と、ルーマニア、ブルガリア、スロバキア、スロベニアの東欧4カ国、計7カ国が加盟した。

今回、ウクライナがNATOに加盟しようとする（NATOのパートナー国になつてい）のは、それに違反し「レッドゾーン」に入ることだと主張する。それはロシアにとって許せないことだとする。NATO軍の兵力がウクライナにも配備・展開すれば、ロシアは大きな脅威にさらされる、としている。

しかし逆に、ロシア軍の動きはウクライナにとって大きな脅威だ。そもそも、ウクライナは独立国家であり、NATOに加盟するか否かは、自由はずだ。プーチンが兄弟国だとみなしているウクライナが加盟するのは裏切り行為だとして、「自由にさせない」とい

きまれている。兄弟国が離反するのを力で押し留めようとする。

ウクライナ侵攻に関して、現代のロシア皇帝・プー

チンの本気度は高い。脅しや譲歩を引き出すためだけではない。かなりの可能性で現実味を帯びている。大地が凍った冬の時期が、戦車・装甲車を走らせるのにちょうどよいとされている。クリミア半島や、ウクライナの国境沿いに、ウクライナを取り囲むように、陸上部隊が集結しているだけでなく、ウクライナに国境を接するベラルーシを経由しての侵攻も十分に考えられる位置に配置されている。ベラルーシは、ロシア軍が国土を通過することに関して協力的だ。独裁者同士（プーチンとルカシエンコ）が仲良く話し合つて、了済みということだろう。

プーチンは、ウクライナがNATOへの加盟は脅威だと言いつけている。「脅威」というのは、いいわけだろう。ウクライナがNATOに加盟したら、侵攻するチャンスがなくなるのが大きい。NATO軍に対抗するのは、さすがのロシアでも困難だ。侵攻するのは今のうちなのだ。NATOに加盟したら、ウクライナ侵攻はほとんど困難になる。加盟する前に、侵攻してやろうと準備しているわけだ。

これまでも、また、ロシアはクリミアを併合した、さらに、ロシアはウクライナの東部を占拠した。東部地域に武力侵攻し、実効支配している。ウクライナ包



困網を形成している。プーチンはウクライナの支配地域を広げるつもりなのだ。この占拠区域をさらに拡大することを狙っているわけだ。

現在、ウクライナの東部に侵攻している部隊は、親ロシア派武装勢力とされるが、実質的にはロシア正規軍に準ずる。ロシア政府の息のかかった軍隊だ。ミサイルなどロシアの最新兵器を持ち込んでいる。2014年7月にマレーシア航空機を撃ち落とした「実績」がある。それは民間機を敵機と誤認してのことだろうが、プーチンにしてみれば、「部下がやったこと」というところだろう。

ウクライナが徐々にロシアに敵対し、西寄り傾いていることに、プーチンとしては焦りを感じているのだろう。友好関係を築くより、武力で手なずけるしかない、と追い込まれている。

プーチンには、ロシアとウクライナは兄弟国だという思いが強い。むしろロシアにとって、歴史的にウクライナは宗主国、祖国の地だろう。ソビエト連邦時代、多くのロシア人が行き来していたところでもある（ウクライナの人口の2割ほどがロシア人。ウクライナの東部に多い）。ウクライナがNATO加盟を目指していることが、ロシアにとって脅威になるという言い訳

をしている。ウクライナに、モスクワを目標とするミサイル群を並べ置かれたらたまらないと説明するが、なによりも、ウクライナが西側に組み込まれることが我慢できない。そこで武力に訴える。プーチンは、西側に合意しないのなら、武力侵攻すると強迫する。

「テメーらが合意しなかったから、オレは武力侵攻に踏み切ったのだ」という言い訳を用意している。強力な兵力をバックに、プーチンは西側に無理難題をふっかけている図でもあるが、目的は、NATOに関して欧米と合意することよりも、あくまでもウクライナ侵攻だろう。

プーチンの領土拡張意欲は強い。アメリカが「侵攻なら制裁する」と警告しているが、経済制裁ぐらいなら、プーチンの意欲を押しとどめることはできないだろう。

ここで北方領土に関して付記すると、日本が「二島だけの返還でいいから、平和条約を結びましょうよ」と打診しても、プーチンはガンとして譲らない。もう〈北方四島はロシア領だ〉という既成事実をすっかり固めようとしている。ロシア国民の中にも、いまや、日本に返してやってもいいという奇特な人はいないだろう。そのために、プーチンは「自国の領土」を割譲

したりしないという憲法まで定めた。

日本にとって北方領土の返還はもはや絶望的になっている。過去の日本には、アメリカの思惑をくんで、「二島だけじゃダメだ」と、ロシア（当時ソビエト連邦）との平和条約の締結をつっぱねた政治家がいたけれど、それさえもかなわなくなったのは滑稽（こっけい）というものだろう。

#### ⑪ 中国・権威主義国家の圧政ぶり

【毎日新聞夕刊 2021/7/2 一面】

仏当局、ユニクロへの捜査開始。ウイグルの人道に対する隠匿の疑いがある。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/24 国際】

米半導体大手インテルが、強制労働の批判が高まっている中国新疆ウイグル自治区の製品や労働力を使わないよう仕込み先に求める通達を出したことで、中国で反発が広がっている。中国共産党機関系の新聞社説で「びたらめで目障りだ」と反発した。「インテルは中国から出て行け」との声が広がるなどしたため、インテルは23日、謝罪に追い込まれた。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/18 国際】

香港立法会選、親中派圧勝へ、民主派を締め出し。当局正当性確保へ躍起。】

【読売新聞朝刊 2021/12/25 国際】

中国、李田田さんは、南京事件（1937年）で犠牲者が30万人に及んだとする中国政府の公式見解に反する主張を支持した（賛意を示した）ところ、中国当局に拘束された。湖南省の女性教員が南京事件の犠牲者数に疑問を投げかけた授業の動画がSNSに出回ったことで、学校から除籍処分をうけた。李さんはその女性教員の肩を持ったところ、当局に拘束され、精神科病院に入院させられた。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/30 国際】

香港当局が編集幹部らを逮捕。資金凍結。香港民主派メディア「立場新聞」（「香港に自由を」と訴え続けた）が廃刊に追い込まれた。扇動的情報を流した疑い。スター選手デニス・ホー氏も逮捕された。】

中国は、権威主義（あるいは専制主義）国家といわれている。共産党の幹部が実権を握る「一党独裁国家」といえる。（一党独裁であれば、共産党でも何々党でも、いいのかもしれない）その党にとって他党を排除していることは一番権力を発揮しやすい形態だろう。

他党からの異論が出ないことは、政権を運営する上で、やりやすい。他党と議論する必要もないし、指導者の立場で、自分たちの意のままに国を動かせる。

国民（人民たち）はその支配下にあることが、改めて認識させられる。支配下にある民衆から、批判や反論の声が上がれば、もちろん、抑圧・統制する。批判を許さないのが、権力者たちの特権だ。エリート意識の強い彼らは「人民の〇〇どもに政権を渡すわけにはいかない」と思っているから、体制を民主化するなど、とんでもないことなのだ。

権威主義は、国民のための政府という民主主義とは、一線を画す。支配される側の人々が多数決で決めるような体制ではない。人民は、政府に忠誠を尽し、従わなくてはならない。支配者のための体制になっている。つまり、主権は彼らにある。当然のごとく、人民の権利が狭められる。

政府の中でもトップに君臨する習近平の力は絶大だ。大国・中国のトップだから、大したものだ。党内で実力でのし上がってきた人物だろう。彼は国家主席三期目（通常二期で退任する）を確実にする。中国14億人（推計）の頂点に立ち、権力を掌握したのだから、「習近平、おそろべし」というフレーズが私の頭に浮

かぶ。

#### 1. ウイグル族いじめ

新疆ウイグル地区では、あいかわらずウイグル族が悲惨な目にあっていることが、よく知られている。漢民族主体の政府の方針で、ウイグル族にとって屈辱的なことが次々に導入され、施行されている。その多くの人が、行動や信仰の自由を束縛され、強制労働させられている。国際的な人権問題として、国際批判の対象になっているが、中国はそんな批判に対して「逆切れ」を起こしているほどだ。あくまでも政府の方針を正当化し、臆する色もない。

・ 独立運動など、ぶつ潰す。そんなことを言うやつがいれば、「反逆罪」「国家転覆罪」で取りしまる。  
・ 反抗は許さない。反抗するように民衆がいれば、支配体制が揺らいでしまう。権威を見せ付けるために、反抗を口実にして、さらに締め付けを強化してきた。

・ ウイグル族を工場に押しこめて、強制労働させる。職業訓練させる名目だが、実態は強制収容所だ。ここで生産した綿製品は、輸出され、外貨稼ぎに貢献している。ウイグルの綿を使用する製品を扱ってい

る企業が批判されたりする。日本では、ユニクロが槍玉に挙げられた。(おそらく、ウイグルで生産すれば、人件費など、ただ同然かもしれないから、コスト意識の強いユニクロが目をつけたのだろう) 職業訓練所や工場は、ウイグル族を感化(洗脳)するための施設でもある。

・イスラム教信仰を禁止する。モスクを次々にぶっこわした。信仰の自由など、中国にはない。

・ウイグルの文化や言葉など、禁止する。子どもへの教育の場で、統一言語を用いて、ウイグル語などしやべらせない。

・ウイグル族に対しては、厳しい産児制限が行われていることも伝えられる。違反すれば、中絶や不妊手術が強制的に行われる。

・厳しい弾圧にたえられず国外に逃げようとしても、パスポートや出国許可証など、中国政府は決して発行しない。ウイグル族は国外でもテロ活動をするからという理屈がつけられる。

## 2. 香港の民主化の夢が砕け散った

香港の民主化運動が、中国中央政府の意向で押しつぶされた。民主化のために大規模なデモを散々やった

けれど、結局は、民主化とは逆方向へ牛耳られてしまったのだから、皮肉なものだ。なまじ騒いだものだから、締め付けがきつくなった。活動も言論も議会も、すべて一掃される事態になった。もし騒がなければ、香港の自主・自由の雰囲気をもっと長く続いたろう、と思われる。

彼らは失敗に終わったことになる。かなりの挫折感を味わったことだろう。人々の声や意思を踏みにじる政権の権力の強大さがある。支配するものと、されるものとの差が、歴然と示された。中国では、人々が騒ぐと政権の圧力がますます強まる傾向にある。支配者は体制をより強固なものにしようとする。

・香港のいたるところで、監視カメラで見張られている。

・もうデモ行進など、一切できなくなった。

・言論が統制され、反政府的な言動は取り締まりの対象になる。民主派メディアの報道機関・出版社(書店を含む)、ネット上のSNSでさえも、次々につぶされ、政府に不都合な情報が消去される。当局が

業者や団体の資産を凍結してしまう手口を使うのだから、政府にいらまれたら、営業や活動ができなくなる。

・議会においても、立法会をはじめとして、民主派とみなされた人は立候補できない仕組みにされ（愛国者と認定されなければならない）、親中派ばかりの議員となるのだから、民主派の声など議会に届かないことになっている。

・ネットにおいても、下手な発言をしたり、告発しようとしたら、即刻「削除」される。

香港人には、政治的、思想的、信条的な自由など、一切与えないという政府の方針が徹底している。中国政府は、香港の中国化に成功したことになる。香港から「一国二制度」の看板を剥ぎ取った。香港人を飼い慣らし、中華思想の下に組み入れた。

### 3. 天安門の記憶

天安門事件も、民主化を求める若者たちの運動だった。中央政府は、体制（一党独裁）を守るために、騒ぎが大きくなってきたとみるや、軍隊を繰り出して、一気に押しつぶしてしまった。装甲車で民衆を蹂躪した。その強引なやり方は、香港でも語り継がれ、複数の記念碑が設置されていたが、政府は天安門事件の記憶さえも、消そうとする。記念碑などは完全に撤去さ

れた。そんな事件はなかったものにされる。その歴史的事実さえ抹殺しようとする。

でも国際社会は、中国共産党政権の重大な汚点としていつまでも記録するだろう。

### 4. 南京事件の記憶

中国政府は、南京虐殺の数は30万人だと主張してはばからない。30万とは、被害の大きさを強調しすぎている。それは極端に偏った一説を根拠にしたものだろう。統計や記録、学説を一切無視した数値だろう。中国政府にとってその数が大きいほど政治的に都合がいいと考えたのだろう。政治権力者が押し付けた数値になっている。

その数値には、中国国内でも、疑問の声が時々上がるようだ。「それは、いくらなんでも誇張だろう」と異論を唱える者が出てくれば、公権力で取り締まっている。そんな人を当局が精神科病院に押し込んでいる例が報道されている。教職者なら、即刻解雇だ。彼らにとつて、30万人以下の数値は、不都合な数値なのだろう。（うそがばれてしまうから？）

歴史的事実を直視しようとしなのは、横暴というべきだろう。自分が言い出した説をガンとして譲らな

い偏屈者の言い分にも似ている。

その数値は諸説あるとして、3万人だろうが30万人だろうが、まさに五十歩百歩のことだ。日本が敵対した中国人たちを次々に虐殺した事実は確かだろう。日本軍の恐ろしさ・野蛮なところを中国人たちにわざわざ見せ付けていた例がいくつもあったのだから、どうしようもない「祖先たち」だ。

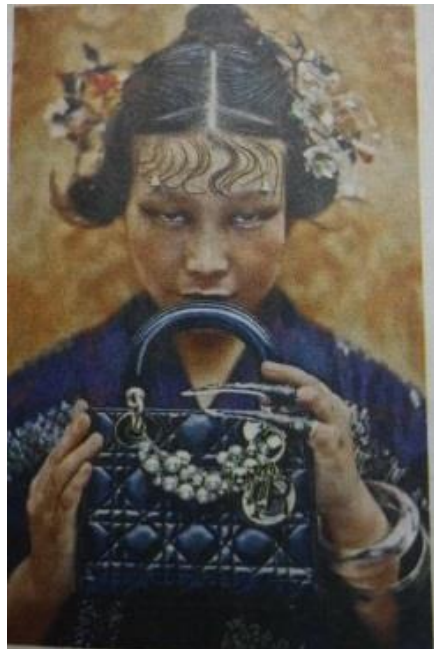
靖国神社は、中国の人たちに永遠に嫌われそうだ。

## ⑫ デイオール広告モデルの無愛想

【毎日新聞夕刊 2021/1/26 総合】

デイオールが中国の美術展で今月12日に上海で公開した女性モデルの写真に、「アジア人や中国人を侮辱している」といった批判が殺到し、25日までに写真の撤回に迫り込まれた。北京日報はモデルについて「陰悪な目つきで暗い表情だ」「化粧に違和感がある」などと批判。」

これは、未開の部族の女性が着飾り、「猫に小判」的なバッグを見せつけているポーズになっている。



アジア系女性を侮辱していると批判されたデイオールに悪気はなかったのだろうが、アジアと欧米の文化の違いを理解していなかったのは大きな落ち度だったと言えるだろう。デイオール側にしても、なぜ批判されるのか、最初はわからなかったかもしれない。アジアの人々に嫌悪感を与える（気持ちわるい）作品になっている。アジアの人々にとって、特にモデルの表情と化粧が醜悪にみえる。「侮辱した」とはいえないにしても、受け入れがたいものだろう。要は、西欧では美であっても、東洋では醜に見えるという違いが、私

には興味深い。

デイオールは、アジア人（おそらく日本人）をモデルとし、アジア的な要素をいくつか取り入れ、中国人写真家を起用して撮らせたわけであり、政治的な配慮も必要な中国市場での拡販を目指して、いろいろ気を使ったのだろうが、こんな嫌われる写真を世に出してはいけない。結果的に、多種の高級品を扱うブランド名に傷をつけてしまった。

西欧的感覚をもつ中国人写真家が取り仕切ったようだが、この写真を撮るために、おそらく多くのスタッフが係りながら、こんな不出来な作品が発表されたことを考えてみると、デイオールの担当者をはじめ、これを撮影した助手やヘアスタイリスト、メイキャップ担当、モデルを着飾るスタッフたちには、アジアをよく知る人も含まれていたはずだが、その誰もが助言できなかつたようだ。一流の芸術作品にするつもりで製作協力したのだろうが、制作スタッフたちは、たとえ違和感を持ちながらも、口出しできなかつたとみえる。アジア的な重要な要素としての「女性の愛嬌」が欠けている。

このモデルは正面からにらみつけている。目の周りには濃いアイシャドーを入れ、目を吊り上げ、三白眼

でにらんでいる。頬は、殴られたような痣にも見えるものだし、あるいは茶色の刺青を入れているかのようだ。歌舞伎の隈どりをイメージしたものかもしれない。こんな化粧は、一般にはあり得ない。

デイオールのブランドの黒いバッグの取っ手に口をつけるように、両手で掲げ持っている。今にも噛みついて、バッグを口にくわえそうなくさだ。

左手には、大きすぎる腕輪を複数つけている。左手の中指と小指には、長く鋭く上がった、黒い爪をつけている。この爪は、悪趣味だといわれても仕方がない。

バッグにまとわりつくブドウの形の装飾品は、ごてごてとして、虚飾の光を放っている。バッグを買うとこれもついてくると思ったりすると、デイオールの販売員に笑われたりして。

服装は、深い紺の和服のようだ。喪服のようにも見える。ヘアスタイルについては良くも悪くもないのだが、特徴的であり、人によっては好みが分かれるだろう。くつきりと左右に分け、頭の中央で束ねたもので、中国風だろう。前髪を、線虫のようにくねって額にたれ下げているのがしゃれている。頭の左右に大ざっぱな花飾りをつけている。

背景にしても、退色した唐草模様のようなのだが、よく見ると、もやもやした炎が立ち上がっているかのようだし、モデルの顔の隈と同化しているから、ますます気味が悪い。彼女の好感度は、限りなくゼロだろう。

刺激的な、インパクトのある写真に仕上がっているという見方もあるだろうが、見る側の多くの人にしてみれば、ゾツとさせるものになっている。あるいは、ギョツとさせる効果があるだろう。マイナスイメージが強い。

このモデルは、あたかも、ホラー映画のゾンビのような表情をしている。アジア人が人前でこんな表情をすることは、一般にあり得ない。商品を持ち上げる態度ではない。バッグの中に凶器を隠し持っているかのように連想させる。せつかくの商品が、台無しだろう。

これでは、広告といえでも、上海で抗議の声が沸き起こるのは、当然だろう。美的感覚の違いだろうなどと言いつつ通じそうにない。こういうならみつけると写真は、西欧ではよくあるものだろうが、アジアでは見慣れない。西欧では、一般的に、広告のモデルはツンツンしている。今回の写真についても、西欧では、違和感が少ないのだろう。

つまり、文化の違いが、受け取る側の感覚の違いなっている。西欧では、こんな写真が芸術的などといわれて、評価されるのかもしれないが、アジアでは、芸術うんぬんより、女性が、可愛げがなく、嫌われる表情をしているからいけない。西欧では「女は愛嬌……」という格言はないのだろう。そもそも男女差を分けるような格言は、今後、禁句になるのかもしれない。

だいたい、新聞雑誌の広告を見ると、西欧の広告モデル、あるいはファッションモデルが不愛想に徹していることに気づかされる。彼ら彼女らは全然うれしそうでないし、むしろ、どこか投げやりでふてくされている。

ランウェイを歩くモデルは、ほとんどツンツンしている。あるいは無表情で、冷たいロボットのよう振る舞うことに徹する。愛嬌を振りまくことはない。もちろん照れ笑いをするような者はいない。これ見よがしに、プライド高く、観客の視線にも無関心をよそおい、「さあ、かかっていらつしやい」とでもいうように挑戦的な態度で肅々と歩く。モデルは「お高い」のだ。